
悪夢は影と蠢く ~ 現代滝口譚 ~

世木維生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪夢は影と蠢く ～現代滝口譚～

【Nコード】

N5408A

【作者名】

世木維生

【あらすじ】

影を操る魔人・御影司郎。人ならざる「魔」を狩る滝口・渡辺詩緒。月夜に二人の黒衣が戦いの幕を上げる。その死闘の鍵を握るのは、一人の少女だった。

第壹夜・悪夢は死神を誘う（前書き）

5月26日「魔方陣」誤を「魔法陣」に修正。
魔方つてどの方向だ…すみません。

第壹夜・悪夢は死神を誘う

私は必要のない人間だと、初めて思ったのはいつだろう？

死んでしまえば楽になれると、考え始めたのはいつからだろう？

月の夜だった。

満月だったか、三日月だったかとか、そんな事は覚えていない。

今から自殺する人間にとって、そんな事は些細なことに過ぎないと思う。

もしかすると、

「ああ。私は満月の夜に命を絶つんだわ……」

みたいな事を考える人もいるのかも知れない。

でも、私はそれは違うと思う。

その人は本当に死にたいんじゃないで、そういう立場の自分に酔ってるだけだと思う。

だって、私は何も覚えていないもの。

何を考えて歩いたのか、何を思ってそこに向かったのか。

そんなことさえも。

気がついたら私はビルの屋上らしき場所にいた。

そこからの記憶は残ってる。

風が強かった。

髪が風に乱れた。

着ていた服が風に押し付けられた。

風が血の匂いを運んできた。

そこはすでに死んだ後の世界だったのだろうか？

黒いロングコートを着た男がいた。

その下に身につけている服も黒一色だった。

銀髪の、赤い瞳の長身の男。

それまでの私は鎌を持った髑髏をイメージしていた。

でもこの時に、そのイメージは、この男の姿に塗り替えられた。

死神だ。

男は死神だったのだ。

不思議な記号の描かれた、円の中心にその男が立っていた。

その円、恐らくは魔法陣といわれるもの、の上に数人の人間が血を流し倒れている。

あの人たちは死んでいるのだ。

私ももうすぐアレになれるんだ。

「お前は死にたいのか？」

そこにある人の亡骸を、悲鳴も上げずに呆然と見ていた私に、男は静かに語りかけてきた。

私は、頷いた。

「お前は何故、死を求める？」

「私は誰にも必要とされていないもの、私の存在する意義がないもの。生きることに疲れたもの、生きることが無駄なもの」

思っていたことが素直に言えた。

いつもは誰にも心を開けない。

開きたくもない。

こんなこと、誰にも言えない。

相手が死神だったから言えたのだろうか？

「だったら、私がお前を必要としてやろう」

死神は口元で薄く笑った。

その後は何があったのか、何をしたのか覚えていない。

気がついたら、私はいつものベットの上だった。

私は、まだ生きていた。

死神に会えたのに、死んでいない。

あれは夢？

夢だと思う。

だって、ビルの屋上で死体が発見された事件なんて報道されてない。

死神を見た夢だったんだ。

私が本当に死ねるのはいつなんだろう？

第貳夜・鈴、影と踊る

三日月の夜だった。

繁華街にある雑居ビルの屋上に、対峙する黒衣の姿が在った。

近くのビルの屋上に備え付けてある、大きなネオン看板の光を受けて、二人の影が伸びている。

一人は銀髪、赤目の長身の男性であった。

黒いロングコートを夜風に靡かせている。

黒い革手袋をした左手を、牽制するようにもう一つの影の主に向けていた。

一人は黒髪、黒目の美しい少年である。

その左手首にある小さな鈴が、夜風に微かな音を奏でる。

両手で構えた日本刀を、相対する男に向けていた。

「滝口、か」

口元を歪め、銀髪の男が言う。

滝口とは平安の世に生まれた滝口武士団、退魔・破邪の役目を担った侍たちのことである。

人の世に仇なす、人ならざる存在を狩るのが彼らの役目。

その存在が、歴史の闇に消えた現代も彼らは動いていた。

「お前で何人目だ？」

男は嘲る。

「黙れ」

滝口の少年は表情を変えず、そう言い放った。

「……安心しろ。俺で最後だ」

言いながら構えを変える。

正眼から左八相へと、ゆっくりと刀身を移動させる。

「渡辺詩緒。お前を殺す人間の名だ」

「面白い」

殺すと言われた男は、しかし不敵に笑った。

そして、続けた。

「御影司郎。お前を冥府に誘う者だ。と、でも返そうか」
「ほざくな」

詩緒は一言、吐きつけると御影との距離を瞬間に詰めた。刹那、切っ先を男に目掛けて突き出す。

辺りに、三度、金属同士が弾ける様な音が響いた。

御影の両手には何もなかった。

詩緒の刃を遮ったもの。

それは影、だった。

御影の足元から、地面ではなく、空間に伸びた黒い影であった。

障壁を形成している影が動く。表面が波打つ。

「くっ！」

詩緒は瞬間的に何かを感じて、後方へと跳んだ。

たった今、詩緒の首があった場所を、空気を裂いて、壁から産まれた黒い影の刃が薙いだ。

二つの影に再び距離が出来る。

御影はゆっくりとした拍手を詩緒に送った。ビルの下から聞こえる喧騒に、その音は溶ける。

「彼の達人、沖田総司は一足で三度の突きを放ったとか……成程、ああいう神業なのだな」

意志を持った生物の様に、影が自分を生んだ御影の横に立つ。

「それでどうかな？ 君から見た、私の技は？」

自分を殺そうとした少年に、悠々と尋ねる。

「茶番だな」

「ほっ……」

詩緒の返答に御影の眉がぴくりと動いた。

「くだらない穢れた力だ……お前ごと俺が消してやる」
詩緒は構え直す。

「……余程、無様に殺されたいらしいな。滝口……」
御影の顔が怒りに歪む。

「望み通りに殺してやろう……肢体を生きながらに、一つずつ切り離してやる。お前に見せてやろう。お前の腕を、足を、我、影が喰らい、滴る血をすする様を……」

御影の影から、何かが産まれ出る。

切り離された影の一片は蠢き、姿を頭わにしてい

それは大型の肉食獣を彷彿させる、しなやかで力強いシルエットだった。

「地獄を見る！」

御影が狂気の赴くままに叫ぶ。

その声と共に影の魔獣は無音の咆哮をあげ、少年に躍りかかる。

「紳士面より、お似合いだな」

詩緒は呟くと、魔獣を正面に迎え、身を低くし駆けた。交差ざまに刃を走らせる。

魔獣の頭部が縦に割れた。その刹那だった。御影が詩緒の背後を取る。

「終わりだ！」

勝ち誇り、嗤う。滝口の少年にその右手の平を向ける。そこに影の魔弾が発生した。だが、詩緒はその動きを察していた。片足を軸にし、振り向くと同時に背後の敵に刀を振るう。

屋上の入り口である錆びた鉄扉が激しい音を立て開いたのと、御影の放った魔弾が床のコンクリートを撃ち砕いた音が響いたのは、ほぼ同時であった。

黒衣の二人は距離を作る。

風が男のコートを靡かせ、少年の鈴に微かな音色を奏でさせる。

詩緒の腹部あたりの衣類には、まるで削り取られたような穴があった。その周囲は血に染まっている。

御影の左腕がだらりと力無く下がっていた。血がぼたぼたと地に落ちては影に吸われていく。皮一枚残し、その左腕はもはや繋がっているのが不思議な状態であった。

「詩緒！」

開かれた扉から現れた少女は、黒衣の滝口の方へと駆け寄った。

「新手か」

少女を見た御影は、しかし、焦りを感じさせずに言う。

「……面白い。そちらも二人か」

不気味に笑った。

その体が足下から、ずぶずぶと異音を立てて、自らの影に沈んで行く。

「次の機会までその命、預けておこう」

地べたに置かれた生首が恨みを呻くように、首だけがそこに残された御影は低く声を出す。

ついには頭部も影に飲み込まれ、消える。

屋上には少年と少女だけが残された。

魔獣の姿も、影を操る男の姿も、もうそこにはない。

「ちよつと……大丈夫？」

不安げに少女が聞く。

少女は整った綺麗な顔立ちをしていた。

白い肌がネオン光に染まる。

茶色がかつた長い髪がきらきらと輝いて見える。

「問題ない。かすつただけだ」

詩緒が即答する。

その言葉を聞いて、少女は安堵の表情を浮かべた。そして、一変、私が現れて助かったでしょ？ 貸し一つね」

と、得意げに微笑んだ。

「お前のせいで、奴を仕留め損ねた」

詩緒は一瞥し、無表情に返答した。

「なんですって！」

少女の柳眉が上がる。

しかし、その怒りの声を流して、詩緒は尋ねた。

「瑞穂。凶事が起こるのはどの方角だった？」

「え？ 南東だったよね？」

突然の質問に、瑞穂と呼ばれた少女は怒りを忘れ、きよとんとして答えた。

「ここはあの場所から北西だ」

詩緒はそう吐き捨てると、一つしかない出口へと足を向ける。

「な、なによ！ たまには私の占いだってはずれるわよ！」

瑞穂はむきになって反論をするが、その言葉はすでに詩緒の耳には届きはしなかった。

後方の瑞穂の声を無視して、滝口の少年は屋上から地上へと続く非常階段を降り始める。

金属の螺旋階段に、その足音が響く。

一瞬だけ、痛みを顔に浮かべて、

「……二人、か」

と、鈴の剣士は呟いた。

第参夜・悪夢は死神と交錯する

ここ最近、毎日、同じような夢を見る。

私の夢だけど、その夢の主人公は私じゃない。

主観と客観が交錯してる夢。

私は、その夢の主人公の中に存在してるのだ。

私が思うことは、主人公である「彼女」には届かない。

「彼女」の考えも、私には届かない。

「彼女」と私の関係は、視覚だけを共有する多重人格者の人格同士みたいなものだ。

だから、その夢は「彼女」の目に映ったものを、ただ見せ続けられるだけのもの。

音のない映像だけの夢。

私の意識が同居している相手が、どうして「彼女」だと解ったのか？

鏡に映った、その姿を見たからだ。

銀髪の長い髪、赤い瞳の少女。

そう。

「彼女」は、あの男と同じ身体的な特徴を持っていた。

「彼女」も死神だったのだ。

私が見る夢は、夜の闇に「彼女」が仕事をする様子。

死神の仕事。

あの世に死者を送ること。

人を、殺すこと。

「彼女」は昨日も仕事をしていた。

丁度半分に割れた月が浮かんだ夜だった。

オフィス街に「彼女」はいた。

人の気配はない。

深夜なんだ。

当然といえば、すごく当然なことだ。

オフィスビルの中には、ガードマンとかがいるんだろう。でも、そこはビルの外だ。

「彼女」の他には、やはり誰もいなかった。

「彼女」が何かに気づいた。
左の方を見る。

たぶん、その何かはヒールの足音だったんだと思う。
だって、そこには、こちらに向かって歩いてくる女性がいたから。
年齢は20才後半くらいだと思う。

スーツ姿がとっても似合った人。

女性は「彼女」の前を横切る。

数歩、歩くと止まって、こちらを振り向く。

「彼女」が呼び止めたのだろうか？

たぶん、あの男の死神だったら、その女性は止まってなかったと思う。

女性は逃げだしたんじゃないかな？

「彼女」は見た感じ、私と同じくらいの年頃に映ると思う。

女性から見たら年下の少女だ。

だから、油断したんだろう……。

まさか、「彼女」に殺されるなんて、夢にも思わなかっただろうと思う。

女性の頭が飛ぶ。

女性の首が、「彼女」の手に現れた、大きな黒い鎌で切断されたのだ。

人が殺される夢。

最初は怖かった。

でも、もう何も感じない。

毎日、毎日、他人の死を見てきたからだろうか？

人が呼吸して、食事するみたいに、死も自然に身近にあることだ
と覚えてきた。

だから、もう人が死ぬことをなんとも思えなくなってるのかな？

それに、これは夢でしかないんだ。

そう、夢。

だってありえないもの。

この後のことなんて、本当に夢でしかありえないことだった。
夢だから起こる、バカみみたいな出来事。

「彼女」はいつもだと、人を殺した後、間を置かず次仕事を
始める。

死者をあの世に送ることだ。

だが、その日の夢では、すぐにその仕事をしなかった。

後ろから、男に呼ばれたのだ。

殺された女性のように、今度は「彼女」が後ろを振り返った。

そこで予測不可能な、夢でしかありえない人物が登場する。

「彼女」を呼んだと思われる人物。

それは日本刀を持った、中年男性だった。

ほらね。

夢じゃないと、ありえない展開でしょ？

正直、この夢を見るまでは、本当は現実なのかも？と錯覚を起こしかけてた。

でもこの話は、現実ではありえない。

街中に刀を持って歩く人間なんていないのだから。

やっぱり、これはただの夢……。

男は「彼女」に怒鳴ってる。

なぜか怒ってるようだった。

そして、「彼女」に日本刀を向けた。

死神を相手に、人間が武器を持ったところで勝てるわけがないのに……。

予想通り、勝負は一瞬で決着した。

男も女性と同じ運命をたどった。

そして、「彼女」は二人の亡骸を、いつものようにあの世に送る。

何も不思議なことはない。

これは単なる夢の話なんだ。

死神の男の夢。

あの印象を引きずった夢。

まだ死にたい気持ちは変わってない。

だから、死神の夢を見るのだろうか？

ああ、そういえば「彼女」は少し、私に似てるかも。
自殺を考える私にとって、死神は私自身なんだろうし……。

いつそ「彼女」が私を殺しに来てくれないだろうか？
そうすれば楽なのに。

不思議と自殺を実行に移せないから……。

あれ？

私は確か、自殺を決意して、一度、家を出たような……。

私はたぶん、今夜も「彼女」の夢を見ると思う。

いつまで「彼女」の夢を見るんだろう？

私が死ぬまで？

第四夜・少女、影を被う

瑞穂の額に汗が滲んだ。

彼女は意識を集中し、患者を診ていた。

ベットには横になった少年の姿がある。

その腹部には深い傷があった。

患部に触れるか触れないかの微妙な距離を保ちながら、手の先でそこを撫でよう動かす。

その白い細い指には、人の形をした紙を挟み持っていた。

それは、人形ひとかたという呪術道具であった。

暫くの間、その行為が続く。

その場所は、殺風景な部屋だった。

家具といえば、窓にある無地の白いカーテンとパイプベットが一つ。

ダンボールに無造作に放り込まれた衣類と、フローリングの床に転がる学生鞆から散らばり出た教科書類。

それらが辛うじて、この部屋で未だ人が暮らしていることを教えていた。

そこはベットに横になった少年の部屋。

ワンルームマンションの一室。

渡辺詩緒の部屋である。

彼は一人、日本各地を転々としながら

「魔」を狩っていた。

拠点を持たず、「魔」を狩り続ける滝口を「遊撃」という。

一方、一つの場所に留まり、その地を専門に守る滝口を「防人」といった。

渡辺詩緒は遊撃の滝口。

そして、少女は。

瑞穂は手を止めた。

「……はい。終わりよ」

そして、そう言う息を一つ吐いた。

精神を集中させて、怪我を治療したのである。

瑞穂は顔には疲労の色が窺えた。

彼女の額から汗が流れる。

人ならざる存在や力から受けた傷、呪い。

それは「穢れ（けがれ）」である。

穢れた力に冒された傷、穢れによって発症した病。

それらは治りが異常に遅い。

その穢れが浄化された部分だけしか、回復できないからである。

逆に、穢れが浄化されさえすれば、その怪我や病は、常識では考

えられないほどの短時間で治癒する。

穢れがない肉体は、本来在るべき状態に他ならない。

穢れという原因が消滅し、その怪我や病はなかったことになるか

らである。

穢れの浄化こそ瑞穂が今、詩緒に行っていた治療であった。

人形に穢れを移す秘法、「撫物なでもの」という御被いである。

瑞穂は詩緒の体から穢れが移った人形を、指から放り投げた。

部屋の空を紙の人形が舞う。

舞う紙片に、人差し指を向ける。

瑞穂は静かに、しかし凜とした声で詠唱した。

「火行、火気を以ってを対象を熱す。燃えよ」

人形に呪しゅを掛ける。

呪を受けた人形は、宙で炎に包まれ灰に変わった。

人形を水に流す、火で燃やすなどの処分を行い、穢れを異界に送ることで撫物の儀式は終わる。

瑞穂は儀式の締めとして、それを燃やしたのだ。

「五行」の一つである火行の力を用いて。

撫物。

陰陽と五行の理を以て森羅万象に働きかける呪術。ともに陰陽道の秘術である。

瑞穂は、加茂瑞穂という少女は、現代に生きる数少ない陰陽師の一人である。

陰陽師も滝口と同じく、この国を闇で「魔」から守護して来た者たちである。

その数は極めて少ない。

滝口に比べて数多くの素質を必要とするからである。

「陰陽道は学問よ。魔道そのものではなくて、魔道を陰陽五行に沿って、解析するのが本質なの。だから、習得したからって、秘術が使えるわけじゃないわ。陰陽道の秘術は、その解析行程の副産物でしかないんだもの。解析されたものを行使出来るかは、結局、術者の素質の問題なのよ」

瑞穂が過去に詩緒に言った事のある台詞である。

そして、それは事実なのだ。

だから、陰陽師は極めて少ない。

瑞穂のようにいくつもの秘術が使える者となると、日本に五指とない。五行の一部が扱えるといった程度の術者たちが、その極めて少ない人口の大半を占めているのだ。

「……………」

腹部の傷口は塞がっていた。

何も言わずに詩緒は、はだけていた腹部をシャツにしまいながらベットから起き上がる。

「お礼くらい言いなさいよ」

引きつった笑顔を浮かべて、瑞穂が言う。

御影と戦った夜から数日が経過していた。

「……………なんであの怪我を問題ない、なんて言えるのかしら……………頭、おかしいわよ？ アンタ」

礼の言葉をよこさずに、身支度を始めた詩緒に瑞穂は毒づいた。

御影から負わされた怪我は、決して軽傷ではなかった。

むしろ、あのととき詩緒が、何の支えもなく歩いていたのが不思議なくらいの重傷だったのだ。

あの夜から毎日、瑞穂は詩緒の治療に当たっていた。それほど御影が詩緒の体内に残した穢れは、深く、強力なものだったのである。そして、穢れを完全に浄化させ、完治したのがつい今、だったのだ。

「……………御影を追うの？」

瑞穂が問う。

「ああ」

詩緒が短く返した。

「……………昨日の夜から、宮元さんがいなくなっただわ」

真剣な顔で瑞穂が伝えた。

宮元とはこの都市一帯を守っていた、防人の滝口の名である。

「……………了解した」

恐らくは、すでに彼は生きてはいまい。

詩緒は黒いジャケットに袖を通して、竹刀袋を手を取った。

竹刀袋の中には、その名の示す物体は入っていない。

それには、彼の愛刀が収められているのだ。

「詩緒」

瑞穂は今にも扉を開けて出て行きそうな、滝口に声をかけた。詩緒の動きがドアノブを掴んだところで止まる。

「御影の場所、占おうか？」

瑞穂が言う。

陰陽道は占術にも通じている。

優れた陰陽師は当然、占いにも精通しているのだ。

「お前の占いは不要だ」

それに即答し、扉を開く。

「な、なんで、私限定で不要なのよ！」

「お前の占いの信憑性は、限りなくゼロに近い」

瑞穂は占いが大好きな少女である。

本人は、一番得意なのは占術だと豪語している。

確かに彼女は、古今東西問わず様々な占いに精通している。使用する道具も、かなり貴重なものまで数多く揃えている。

それらに執着するところは、もはやコレクターと言えるレベルだった。

それほど熱心に研究し、強く執着していても、なぜか当たらないのだ。

極めて、当たらないのだ。

事実、詩緒の言う通り、限りなくゼロに近い的中率であった。

陰陽師である少女の体が、細かく震える。

「詩緒！ 待ちなさいよ！ 今日という今日は許さないんだから！」

批判の言葉を発した滝口である少年の姿は、すでに扉の前にはなかった。

瑞穂は背中まで伸びた髪を、宙に泳がせて詩緒の後を追った。

第伍夜・悪夢は暗く、深く

日が暮れて数時間が経っていた。

雲間から時折、九日月が覗く。

藤川真奈は夜の街を一人、歩いていた。

紺色のブレザーと同色のフレアスカート。上着の左胸元のポケットにある白鳥をモチーフにした校章。彼女が着ている制服は、こちら界限では有名な私立進学校のものである。

真奈はまだ、帰宅していなかった。

部活動や委員会活動を行っていた訳でも、友人と遊んでいた訳でもない。

ただ、家に帰るのが嫌だったのである。

彼女は母親と二人で暮らしていた。

父親は、真奈がまだ幼い頃に母親と離婚してしていない。

その原因は、彼女の母親の浮気だった。

そして、真奈が家に帰りたくない理由の原因もまた、彼女の色事にあるのだ。

母親は真奈の帰るべき自宅に、男を連れ込んでいるのだ。

今日に限ったことではない。

連れ込む男は日によって違うが、いつものことだ。

だから、真奈にとって、このような行動は日常的事であった。

母親にとって真奈は邪魔な存在でしかなかった。

愛人との甘い時間を邪魔する存在。

自由に使いたいお金を無駄に消費させる存在。

真奈の母親は、彼女をそのように扱ってきた。

当然、娘の生活に必要なお金を渡すことなどしない。

だから、彼女は自分の生活費は自分で稼いで生きてきた。

金蔓の一人に、女手一つで健気に娘を育てている女を演じている母を、気に入ってる男がいると聞いたことがある。その男は真奈の学費全額と、生活費の一部を負担しているそうだ。

「アンタは、その男から金を貰うためだけの道具なのよ」
酔った母親が真奈に言った言葉である。

それが真奈の母親の、彼女に対する認識なのだ。

母親だけではない。

父親にしても同じだ。

離婚した際に、父親が真奈を引き取らなかった理由。

それは、自分を裏切った憎い母親に、よく似た顔立ちの彼女を嫌ったからだと聞いた。

父親もまた、彼女を邪魔者としたのだ。

だから、真奈は母親に似た自分の顔が大嫌いだった。

パッチリとした二重瞼の目も、通った鼻筋も、色気のある唇も。多くの女性が妬むような美貌を構成するパーツの全てに嫌悪していた。

自身にとっても憎い女性、いや、世界でもっとも忌むべき存在を連想させる、それらをどうして好きになれようか。

そして、同世代をはじめとする他の人間もそうである。

どこから情報が流れるのかは解らないが、幼い頃から、男に金を貢がせる色狂いの女の子として、いじめの対象になってきた。

友達と呼べる人物など、唯の一人も出来たことはない。

周りからは常に白い目で見られ、後ろ指を差される。

それは高校に入学してからも同じだ。

なまじ成績が優秀なだけに、煙たがられ、疎遠にされる。

誰もが彼女を厄介者扱いする。嫌う。

真奈を思いやる人間は皆無であった。

真奈を愛してくれる人物はいなかった。

自分には必要のない存在。

いつの頃からか、真奈の心にはその思いが深く、どす黒くこびり着いていた。

そして、他人を完全に拒絶するようになっていた。

真奈の鞆が向かいから歩いて来た、ボストンバックを持った背広姿の男に当たった。

「あつ、失礼」

しかし、ぶつけられた男の方が謝罪の言葉をかける。

口髭を生やした優しい顔付きの男性だった。眼鏡の奥の目が、申し訳なさそうに彼女を見ている。

真奈はむっとした顔で男性を睨んだ。

そして、すぐに顔を背けると何も言わずに歩き出す。

「あつ！ 君！」

と、男の声が背後から聞こえたが、それ無視をして、真奈はその男との間に距離を作った。

パーマはかけていないが、ややウェイブのかかった黒髪が肩の辺りで揺れる。

足早に歩く。

真奈は苛立った。

他人にやさしく接する人間を見ると、気分が悪くなる。

特に母親と同年代の人間のそういう態度は、気に障る。

無性に腹が立つ。

真奈は、その世代の人間を主な相手にして、生活費を稼いでいた。だから、尚、その世代の人間の汚く醜い部分を見続けて来たのだ。

「偽善者」

吐き捨てる。

その言葉をかき消すようにクラクションが一つ鳴ると、真奈の横、歩道に寄せて一台の自動車が停車した。

どこにでもある、ごく普通のセダンタイプの白い車だ。

「ねえ、君がマキちゃん？」

サイドウィンドウから顔を出したのは、油ぎった顔の頭が禿げ上がった中年男性だった。

彼が呼んだ名は、真奈の偽名である。

出会い系サイト等を利用するときを使う偽名、源氏名だ。

真奈は頷く。

その男が、今日の彼女の買い手だったようだ。

数年前から真奈は体を売っていた。

それが、彼女の生活の糧を得る手段だった。

自分の体に高値が付くことは、解っていた。

短時間で済み、月に1、2度行っただけでまとまった収入になる。

ただ単に、肌を許すだけでいいのだ。

今は、もう、そうとしか思わない。

禿げた男は、真奈を助手席に手招きして誘う。

真奈は誘われたまま、その席に腰を下ろした。

シートベルトを締める。

「マキちゃんは可愛いね」

男は上機嫌に声をかける。鼻の下を伸ばす。

その言葉に反応せずに、真奈は無感情に、ただ前を見て、

「出して」

と言った。

自分は結局、母親と何も変わらないのだ、と真奈は思う。

母親と同じように、女を売ることと生きていけるのだ。

そんな自分を憎いと思う感情は、日々、膨れている。

いや、むしろその憎悪はすでに限界を超え、殺意を孕んでいる。

自分の存在を厭わしく感じる。

死にたい。
自身を殺したい。

本当に、「彼女」が私を殺しに来てくれたら楽なのに。

真奈は思う。

エンジン音を響かせ、車が発進する。

真奈を乗せた車は、ネオン街へと消えていった。

第六夜・魔人、影に嗤う

深い暗い闇。

ただ黒一色の拡がる空間。

そこには地平も水平もなく、天も地もない。

ただ暗黒が支配する宇内。

そこが此の世であるのか、彼の世であるのかは解らない。ただ、確かに存在していた。

その闇の領域は影の支配する領域。

何人も侵すことの出来ない聖域。

御影司郎の影の中に存在する世界。

その闇の中、御影は中空に腰を下ろし座していた。

辺りを首のない躯が、臓物を撒き散らした亡骸が、人であった肉塊が、無数に宙を浮かび漂う。

重力という縛りから解き放たれた、その世界に在る生は彼一人である。

否、御影司郎という存在もまた、すでに死人であるのかも知れない。

御影司郎という人間が魔道に堕ちたのは、大陸の大国がまだ「清」と呼ばれていた時代だった。

彼は魔力によって老化という束縛から解放され、現代まで堕ちた当時の姿のまま生き続けてきたのである。

魔人となった御影は幾度かの戦火の中で暗躍し、魔道で人を殺め、影にそれ喰らわせて、力を増幅させた。彼を討伐すべく立ち塞がった幾人かの滝口を返り討ちにし、その亡骸も魔力の糧とした。

しかし、それでもそれは仮初の永遠である。

老いからは免られても、死という終焉からは逃れてはいないのだ。御影の肉体は、すでに魔力で維持するにも限界を迎えていた。

「……再生が遅いな……」
闇に御影の声が響く。

何度か魔力を使い、再生を試みた左腕。

滝口の少年に斬られたその部位は、ようやく動かせる程度に回復したところだった。

「……やはり肉体の限界が近いようだな……」

ぎこちなく動く左手の指を眺めながら、他人事のように呟く。

魔人はゆっくりと目を瞑ると、傷跡の残る腕に意識を集中した。

背後を流れる上半身だけの女の遺体が、赤黒い煙を噴出しながら急激に乾涸び果てる。木乃伊と化したそれは、脆く崩れ、消え失せる。

御影が再生のために、再び魔力を行使したのだ。

彼の魔力の源は、人間の血肉である。

人の死によって、生贄を使うことで発動させる魔術。それがこの魔人の魔道である。

その為に、この影の内部には彼に殺害された人間が保管されているのだ。

いや、そこに在るのは彼に殺された人間だけではない。

御影の前を首のないスーツ姿の女性が横切る。

それは「彼女」が殺した人間だった。

違和感なく動き出した左腕を満足げに見る。

「まあいい。依代の覚醒まで、あと僅か……邪魔者も取るに足らぬ」
魔人は醜く嗤った。

あの夜、少女が目撃したのは、御影の行っていた凄惨な儀式の現場だった。影に多く死体を取り込ませ、肉体を維持する魔力に変換するのだ。

その儀式を見られてしまった御影は、しかし、黙認した。いつもならば、少女を新たな生贄に捧げたはずである。

だが、少女は目の前に広がる惨状を、無様に殺された遺体の数々を、恍惚の表情で眺めていたのである。御影は少女に興味を持ったのだ。

結局、予想通りに、少女は儀式を妨げることはしなかった。ただ、その惨劇の舞台に魅了され続けていたのである。

儀式を終えた御影は、少女に尋ねた。

「お前は死にたいのか？」

そして、一言、二言交わした後、御影は歓喜に震えた。

御影の影が彼女を欲したのだ。御影の足下から伸びたそれは、彼女の身を愛おしく抱く様に包んだ。同時に彼女の体だけでなく、彼女の影とまるで、まぐわいを行っている様に絡み合った。

少女は影に、次に宿るべき器として選ばれたのだ。そう感じた御影は、纏れ合う二つの影を見て狂喜した。

神という者は存在するのかも知れない。

魔道が存在し得る以上、有り得ることだと御影は思う。

しかし、闇の住人たる自分に、その恩恵が与えられるなど考えもしなかつた事態である。人の道を外れた我が身を罰するというのなら、それは彼の存在が当然のように実行するであろう行為である。

だが、その時、神は確かに御影に味方したのだ。

遠からず滅する定めにあつた御影に救いの手を与えたのだ。

少女の影に、御影は自らの魔力を、自らの影の一部を移植した。

後はその力が彼女を侵食し、序々に元在るその意識を消してしまえばいいのだ。少女の抵抗なく、その行為は進行するはずである。

乗っ取るうとする者と乗っ取られようとする者、その一番に魔力と

意思の力を磨り減らす争いを行う必要はないのだ。彼女はすでに、その身を放棄する意思を有していたのだから。

あと数日もすればそのプロセスは終了するはずである。

魔人は新たな体に思いを馳せる。

若く魔力による維持効率の良さげな肢体。

人を欺くのに的した容姿。

ほくそ笑む。

やがて、それは高笑いに変わる。

「新生の刻は近い！」

魔人は高らかに謳った。

その闇は、その影は、御影司郎の行使する唯一無二の影を操る魔道そのものは、意思を有していた。我が存在を継続させようという意思を持っていた。

そのために術者は必要なのである。

御影司郎はそのことを知るはずもない。彼はその魔道を行使していると思いつながら、その実、魔道に使役されているのだ。

少女の体を使うように彼に道を示したのも、その意思の現れに過ぎない。

男は単に哀れな操り人形に他ならないのだ。

男の笑い声が未だ響く、その影の世界。

男を取り巻く闇は、滑稽なその有様を覆っていた。

第七夜・悪夢は鈴の音を聞く

空に浮かぶのは、満月に向かい丸みを帯びていく月。今、姿を現しているのは三分の二程。

九日月。そういわれる月だった。

その周りに星の光は少ない。

都市の夜空である。地表は灯りに溢れ、大気は淀み、星々の光を遮っているのだ。

それを見上げた瑞穂は舌打ちした。先程、詩緒に否定された己の力量を見直させようと、星を読もうとしたのだ。占星術を行使するつもりだったのである。

その占術は陰陽師が政治や社会に深く関わっていた時代に、彼らが陰陽寮といわれる組織で行っていた星の魔術の一端である。

星は天に在る。天に在るは即ち神。そして、神は地上の命運を握る存在である。

つまり、星空には神の意思が示されており、陰陽五行の理を介して解くことで、そこから未来を読み取るという占術である。彼らは、その結果を政治や社会に活かしていたのだ。そして、秘術を行使して星を祀り、災厄を回避し福を招いた。それがその時代の陰陽師の役割の一つだったのである。

当然、見える星の数が多ければ多いだけ、その情報量は増加する。星が示すは唯、事実のみ。後は術者がその膨大な情報を集め分析し、そこにある未来を、いかに正確に読み解くかが問題なのであるのだが。

「こんなの、やりようがないじゃない……」

この都市部で満月に星が見えないのは当然のことである。まして自分の住んでいる街の空。端からそれに気付かない道理はない。しかし、瑞穂は思い至らなかつた自分を棚に上げ、小声でそう愚痴った。

ふと、視線を前方に戻すと、先程まで一步前を歩いていた詩緒の姿は遙か前方、一区画は先にあった。人混みにかろうじて少年の後ろ頭が見え隠れしている。

「アイツは〜」

眉間に皺を寄せ、呟く。

言うや否や、瑞穂は駆け足で器用に人波をすり抜け詩緒に近づくと、無言でその後頭部をぐうで殴ろうと腕を振るった。手抜き手加減はまるでない。彼女は本気である。

しかし、その拳は虚しく空を切った。まるで後ろにも目があるように、詩緒はそれを難なくかわしたのだった。

勢い余った瑞穂の体は、前方にいた大学生とおぼしき青年の背中与衝突する。

瑞穂はあわてて彼に謝罪の言葉をかけた。そして、詩緒は無表情でその様を一瞥するだけで、結局足を止めはしなかった。

思いがけない美少女との出会いに、青年はむしろその出来事に幸運を感じたようだった。喜びを満面に浮かべて、お茶の誘いを切り出す。その間にも詩緒は瑞穂から離れていった。

瑞穂は青年との会話を手早く打ち切ると、改めて詩緒の後を追いつ、横に並んだ。

「アンタねえ！　かわいい少女をいたわる気持ちはないの!？」
並列して歩く、というよりは小走りで瑞穂は怒鳴った。

詩緒はしかし、それを気に止める素振りを見せない。ただ前を向きながら感覚を研ぎ澄まし、「魔」の気配を探り歩いていた。

彼らは感覚でそれらの気配を感知できるのだ。俗に言う妖気、魔力の波動等と言われる類のものである。

「……なんでこんなヤツと行動してるのかしら……」

無視無言を通す詩緒に、わざと聞こえるように瑞穂は愚痴った。

陰陽師と滝口の協力関係の歴史は古い。滝口という組織が成立した時からの関わりである。

その当時は共に、今で言う政府直属の機関に属する人間であったのだ。陰陽師は政に深い役割も担ってはいたが、共通した目的は「魔」からの守護と、その排除である。宮中を連携し警護したり、目標を共同で討伐したりしていたのだ。

詩緒と瑞穂の関係も二人の人生からすると長い。物心ついたときには、互いを実戦訓練の相手としていた。ある事件が起こってから数年、その関係が途絶えた時期があった。しかし、遊撃の滝口である詩緒が瑞穂の前に現れてから、再び始まり、今に至る訳である。

無愛想で無表情。

詩緒は幼い頃からそうだった。

他人を避けているのだ。瑞穂の知るところ詩緒がまともに話せる相手は、自身とあと一人いた修行仲間しかない。彼の信念を知らなければ、自分だってこんな少年とはかかわってはいないだろうと思う。

詩緒の兄、瑞穂の憧れだった人物、渡辺柁希。

そして、その希代の滝口と謳われた柁希から、詩緒が受け継いだ小さな鈴。

その鈴こそが詩緒の信念の証。

詩緒の左手首に飾り気なく、ただ黒い革紐に付けられた銀色の小さな鈴を瑞穂は見た。根付けに使われるような小さい鈴が、微かな音色を奏でているのだろう。しかし、人混みの騒音にかき消されて、それを聞くことは叶わない。

瑞穂は何かを感じた。

「おい」

詩緒が唐突に声をかける。

それは恐らく、例の魔人が放つ魔力。

「感じたか？」

渡辺詩緒という少年は性格を除けば、やはり非常に優秀な滝口だ

と瑞穂は思う。戦闘能力で彼に匹敵する滝口はそうはいない。加えて索敵・感知能力も陰陽師でもトップクラスに入るであろう。瑞穂もまた稀代の陰陽師と謳われる少女である。その彼女とほぼ同時に、今の微弱な「魔」の感覚を感じ取ったのだ。

「私を誰だと思ってるの？」

瑞穂は薄く笑いを作る。

そして、二人の退魔師は同時に凶方へと駆け出した。

白い肢体がベットの上に在った。一糸纏わぬ姿。女性特有の美しい曲線が、艶めかしく横たわっている。

その裸体は、淫らな秘め事を終え、気だるい微睡みに身を委ねた真奈のものである。

真奈の横には付き出した腹を隠そうともせず、白いブリーフだけを穿いた禿頭の中年男がいびきをかいていた。

真奈は夢を見ていた。

それはいつもの「彼女」の夢だった。

「彼女」が行動を開始する。

「彼女」は全裸であった。その上半身をゆらりとベットから起こす。

それは果たして夢？

本当に夢？

真奈は疑問を抱いた。「彼女」が出現した場所は、真奈が今、眠りに着いた場所だったのだ。その「彼女」の右手に黒いナイフが産まれる。

「彼女」は隣で寝ている男の首筋に刃を当てた。刃先がその太い首にゆっくりと埋まる。

男の顔は目を見開き、痛みと恐怖を叫んだようだ。その男の顔は……

つい先刻まで真奈の体を弄んだ男の顔だった。

ナイフが頸部に根元まで埋まる。

勢い良く血飛沫が上がる。

現実なの!?

真奈は思う。しかし、確かめる術はない。真奈は夢の中なのだ。

飛び散った血を、首に深い真一文字の切口を持った男の死体を、「彼女」の影が包み隠す。

それが、死者をあの世界に送る、真奈がそう思っている行為だった。影に喰らわれ、飲み込まれ消える男の死体、血の跡。行く先は真奈の思う場所ではない。魔人の影の世界だ。

真奈の意思が薄れていく。

それは深い眠りに落ちようとしているのだろうか。それとも……。酷く薄れた意識の彼方で、真奈は微かな音を聴いた気がした。その夢の世界で、初めて目覚めた聴覚に届いた音だった。

……鈴の音?……

第八夜・少女、影と舞う（前書き）

5月26日 「白い」誤を「紺色の」に修正。

致命的なミスです。これにより混乱された方もいるかも知れません。真奈の制服は紺色です。作中に出ていませんが、白い制服は瑞穂の学校のもので、著者が混同してどうするよ……ってまぬけな話です。申し訳ありませんでした。

第八夜・少女、影と舞う

ホテルの一室にいるのは「彼女」一人だけだった。

ソファーには少女の紺色の制服が乱雑に置かれ、ベット脇には男のシャツとストラックスが落ちている。

誰も横になる人物のいなくなったベット。「彼女」はそのシーツを引き剥ぐと、それで裸体を包んだ。

流れ込んだ風が、その銀色の髪を、即席にあしらわれた白いドレスの裾を揺らす。

赤い瞳が風の流れ来る方向に動く。バルコニーに面した大きな窓がそこにあつた。完全に閉じられていなかったようである。

ゆっくりとバルコニーへ足を向け、「彼女」は、ふふふ、と妖しく微笑んだ。

己と同じ魔力の波動、その残滓を持つ何者かの接近を感じたのだ。「あの鈴の滝口が向かって来るのね……」

窓を開き、バルコニーに出た「彼女」をビル風が迎える。白いドレスが靡いて、その下にある艶めかしい裸体の輪郭を露にする。

「私が殺してあげるわ」

妖艶な笑みを浮かべ、「彼女」はそこから地面へと身を躍らせた。

「彼女」が舞い降りた地は駐車場であつた。そこにあつた人影は三つ。車に乗り込もうとする若いカップルと、眼鏡の口髭を生やした中年男性である。

それぞれが驚きを隠せずに、上空から降って湧いた「彼女」を見ていた。

「彼女」が舞うように跳躍する。その右手に黒い大きな鎌が創り出された。影を魔力で具現化したデスサイズである。

着地際に、その死神の鎌を縦に振るう。その一撃は、悲鳴を上げ

ようとした女に、その時間を与えずに死を贈った。

頭部から二つに割れた女の体。返り血を浴び、紅く染まる「彼女のドレス。

恐らくは最愛の人物を失った男は、しかし、ただ呆然としていた。「彼女」の美しさに魅入られたのか、現実を受け入れられずにいるのか。だが、それもすでにどうでもいいこと。男も直後、その人生に幕を下ろすのだ。

大鎌を「彼女」が横に薙ぐと、男の上半身と下半身は切り離された。

辺りに血の臭いが立ちこめると、「彼女」の影が蠢いた。影は二人の肉塊を包む。辺りに散った血痕にさえも、吸い付くように這う。そして、それらを影の世界へと消した。

変幻自在に収縮拡大した影。それは「彼女」の正常な影の形に戻るが、地には伸びてはいない。「彼女」の横に寄り添うように並んでいた。

ただ一人の殺戮の目撃者となった男は、その様子を逃げもせず見ていた。驚きの表情のまま、凍りついた顔。しかし、その口から溢れた言葉は、恐怖を表すものではなかった。

「……真奈？」

男の手にしていたポストンバックが落ちる。眼鏡の奥の目から、一筋、涙が流れた。

「マナ？」

その名前を聞いて「彼女」は首を傾げる。

「彼女」は確かに真奈、藤川真奈に他ならなかった。赤い瞳、長い銀色の髪。確かにそれは通常の彼女のものではない。だが、その容姿はまさしく彼女のもの。声もまた彼女のものであった。

男には解ったのだ。

つい数時間前にぶつかった少女が、目の前にいる「彼女」であり、藤川真奈であることが。

「真奈！」

両手をに伸ばし、男が少女の名を叫ぶ。

しかし、彼に反応は返らない。そこにいるのは藤川真奈であるが「彼女」なのだから。

「ああ。この娘の名前なのね……マナ。ふふ。いい名前」

「彼女」は満足気に笑った。

「その名前、頂くわね……私はマナ。御影マナ」

「彼女」は名乗る。

だが、男にその声は届いていない。真奈を求め、マナに一歩、二歩とゆつくりと歩み寄る。男の頬を涙が次々と流れていた。

その様に興味を抱くことなく、マナが口を開く。

「名前をくれたお礼をあげるわね」

そう死を宣告すると彼女は左腕を男に向けた。開かれた掌に黒い拳大の球体が生じる。それは滝口の少年を襲った魔弾だった。

「ありがとう」

男に微笑むと、マナは魔弾を射出した。

「土行、土気を以って地を断つ！障壁よ！」

駐車場に違う少女の声が響く。その声と共に、男の前にアスファルトが隆起し、文字通り壁が生まれる。

さらに現れた少年が男の体を鎗こしりで突き飛ばす。

少年はその魔弾の威力を知っていたからこそ、男を乱暴に扱った。猶予はなかったのだ。彼の予想通りに魔弾はアスファルトの障壁を貫通した。それは男の体が物理法則に従って倒れようと動き出したと同時にあった。

男が苦痛を叫ぶ。

黒い球体は男の脇腹をえぐり、後方に停車された白いセダンタイプの車両に穴を穿った。

「遅かったわね」

マナは薄笑いを浮かべると跳躍し、葬ったばかりの男女が乗り込むはずだった黒いワゴンタイプの車の天井に立った。

マナの前に現れたのは滝口と陰陽師である。

「お前が二人目、か」

詩緒はいつでも抜刀出来るように身構えた。瑞穂が詩緒の足元で呻く男に駆け寄る。

「その男を任せた」

詩緒は言つと、目の前の瓦礫と化した障壁を踏み台にして跳んだ。右手で左手にある刀の柄を握る。鯉口に添えた左手を引くと鞘から刀身を走らせる。刹那の動き。何時抜き放たれたのか解らない神速の抜刀術。一閃。そして直後には納刀される刀身。

しかし、マナは後方に大きく跳んでそれを避けていた。だが、身を包むドレスの一部が切り裂かれ、白い肌がそこから覗く。

着地する滝口と魔人。互いの距離は大きく開いていた。

牽制の効果を考えれば、剣術において抜刀術ほど優れた技はない。間合いが測れないからだ。距離を作ることを目的にした詩緒の攻撃は見事に成功した訳である。

「行け」

振り向かず敵を見据えたまま、詩緒は言つ。

「力仕事はアンタがすべきでしょうが！」

文句を返しながらも、瑞穂は男に肩を貸して立ち上がらせる。

陰陽師の代名詞たる式神を使えば、彼を楽に運ぶことも出来るのだろうが、人目についてしまう。結局、瑞穂には肩を貸すより他に方法はなかった。

詩緒は瑞穂の文句を流し、二人目の影の魔人との距離を少しずつ詰めていた。マナは大鎌を片手で持ち、空いた左手を詩緒に向けていた。マナは微笑んでいた。滝口と戦うのは二度目である。余裕を持っていた。自身の勝利を確信しているのだ。滝口ごときは敵ではない、と。

「貴方は私を愉しませてくれるの？」

マナが口を開く。

「安心しろ。殺してやる」

じりじりと距離を縮めながら詩緒は返す。

「この間の滝口みたいに失望させないでね」

嗤う。それを詩緒は冷やかな目で睨んだ。

詩緒は背後の苦しそうな呼吸音を聞き取りながら、魔人と自身、魔人と瑞穂までの距離を探っていた。男の呼吸音がある地点まで遠ざかる。予想される安全圏への到達。詩緒の待っていたその瞬間が訪れた。

そして、詩緒はマナに向かい駆ける。抜刀はまだしていない。納刀されたままの刀を構え、中腰の姿勢で疾走する。マナは影で地面から伸びた大盾を創ると右半身を覆うように展開した。左後方に刃を寝かせて鎌を構え両手で柄を握る。双方が一瞬と呼ばれる時間で動き、攻撃を仕掛け、備えた。滝口の刀が斬間きりまに入るや閃く。盾を頼りにマナは全身の力を込めて真横一文字に鎌を振るう。

側面に配されたマナの盾は斬撃に備えたものであった。しかし、詩緒の狙いは彼女の身体ではない。抜刀された刀が斬つたものは彼女の武器だった。

鎌の刃が回転しながら飛ぶ。柄の部分と刃の部分を斬り分けられた大鎌。マナが武器を失ったことに気がつき、魔道の発動を、新たな武器の創造を試みる前に勝負は決していた。詩緒はその暇いとまを与えず、武器を破壊するために振るった刀を手首で返し、逆方向へと走らせた。流れるような巧みな太刀ゆき。そして、マナの喉元で切っ先が止められた。

「渡辺詩緒。お前を殺す人間の名だ」

魔人の赤い目を見据え、切っ先を突き出す間際に滝口が吐きつける。

「待って！」

焦り、マナは叫んだ。

「この娘は操られているだけなのよ……貴方に斬れるの？」

続いた彼女の言葉。

詩緒の刀に迷いが生じた。

第八夜・少女、影と舞う（後書き）

<解説・刀用語>

こいくち鯉口：刀を納める鞘の口。

こじり鑑：鞘の先端部。ある程度の強度を持っており、敵の鳩尾を突いたり、顎を打つたりと、打撃に使うことができる。

きりま斬間：刀の刃が届く範囲。

太刀ゆき（たちゆき）：戦闘で刀を振るうこと。

第九夜・悪夢は影と重なる

「逃したの?!」

瑞穂は、信じられないと続かんばかりの顔で言った。その声は本人が思ったよりも辺りに響いたようで、直後、瑞穂は慌てて自らの手を口を塞ぐように動かした。

静寂に包まれた夜の病院のロビー。そこには瑞穂と詩緒の二人以外の人の姿はなかった。

「何かあったの?」

今度は辺りを意識した声で瑞穂は尋ねた。

「あの女に何か別の魔力を感じたか?」

しかし、詩緒はその疑問に答えず聞く。

「相変わらず、アンタ自己中ね……」

呆れを隠そうともせず瑞穂は呟いた。

「……感じなかったわよ」

そして、ため息混じりに答える。

「……そうか」

目を瞑り、詩緒が呟く。詩緒自身、マナに別の魔力を感じてはいなかった。もしや陰陽師なら、と聞いたのである。

「……で? アンタは私の質問に返答する気はないの?」

瑞穂が苛立たしい気持ちのままに意見する。

「あの女は、操られていると言った」

瑞穂の感情などどこ吹く風と、無表情に詩緒がそこでようやく彼女の質問に返した。

「……どうしてそこでしれっとに答えられるのかな? ……謝罪とか、お詫びの言葉は? ……私、普通のこと言ってるわよね? ……

……疲れるわ……本当……アンタと付き合っの……」

もっともな感想を非難じみて言うが、目の前の滝口の少年には、この言葉も届かないことは悲しいかな理解してしまっている瑞穂が

いた。

「……あの敵は魔道を行使し、会話もした。ただ単純に操られている人間がそこまで高度な芸当を行えるはずはないわ……」

自らを奮い起たせ、陰陽師としての考察を語り始める。

「……精神を支配した上での乗っ取りだとしたら……解るでしょ？ あそこまで進行しているとなると、もう手遅れよ。少なくとも私に呪を感じさせてなかったんだもの。本体の人格はすでに死んでるわ」

他人の意識を魔道で支配し、操るのは呪いの一種である。当然、支配されようとする側はそれに抵抗するから、抵抗されている間はその呪いを継続してかけ続ける必要がある。瑞穂もそれを感知していなかったわけである。つまりはすでに抵抗の意識、対象の人格は崩壊しているということだ。それは人の姿をした「魔」に他ならぬい。

「ああ」

詩緒が呟く。瑞穂の言ったことは理解していることだ。過去にそうなってしまった人間を「魔」として抹殺したこともある。だが、彼は何か納得できない違和感を感じていた。

「……男は？」

唐突に詩緒が尋ねる。

「え？ ああ。本田さんね。命に別状はないそうよ。傷口からの高熱で、今は意識が朦朧としているみたいだけど……」

「穢れ、か」

「熱の原因はむしろそっちでしょうね。まあ、見舞いに来たときでも被っておくわ」

言う瑞穂の足元にあるポストンバックを詩緒は見た。

「それは？」

「これ？ 本田さんの鞆。旅行か、出張なのかしらね？」

詩緒は何を思ったのか、それを取り上げると中身を改め始めた。

「ちよっ、詩緒！？」

瑞穂は慌てて抗議したが、詩緒は当然のようにそれを無視する。

「おかしいと思わないか？」

詩緒が内部から手帳を見つけ、それを開く。

「なにが？ 本田さんがあんな時間に、あんな場所で、こんな荷物を持っていたことが？ でも、それは理由に」

「難しく考えすぎだ」

瑞穂の非難がかつた意見を遮るよつに言葉を発すると、詩緒の手が止まった。一枚の写真が挟まれているページだった。

「どついうことよ？」

「何故、あの男は逃げ出さなかった？」

「あ」

詩緒はそこに記されていたメモの内容を記憶すると、そのページを開いたまま、手帳を瑞穂に渡した。

「藤川真奈、さん？」

手帳に目を通した瑞穂が呟く。

本田の離婚した前妻との娘。この街に住む少女。彼がこの街を訪れた理由。そこに挟んでいた写真に写った少女。その少女は二人目の影の魔人、マナに他ならなかった。

昼休み。藤川真奈は校舎の屋上にいた。立ち入りの禁止されている場所である。そこにあるのは彼女一人であった。

彼女にとつてその場所は校内で唯一の安心できる場所だ。ここにいれば他の生徒と会わずに済むのである。

マナと詩緒の戦いから二日が過ぎていた。

真奈が目を覚ました時、彼女は例のホテルの一室にいた。真奈を買った男の姿はなかった。しかし、衣類のみならず貴重品類までもがそこには残されていた。

「……「彼女」は現実……そして、私……」

ぼつりと零す。その言葉通り、真奈が眠りについたとき、彼女は

「彼女」になつていたのだ。スーツの女性も、日本刀を持った中年男性も、そして、あの時真奈を買った禿頭の男も。その他多数の間も。夢の中で殺された者たちは、現実に「彼女」に殺されていたのだ。

真奈が死神と思い込んだ男、魔人・御影司郎は彼女に呪いをかけていた。それは彼女を影の魔人へと変える呪いである。御影は真奈の意識を消し去り、自分の新たな肉体にしようとしていた。そして、マナという人格はそれを実行する影の魔道の意識に他ならない。彼女に魔道を行使させることで、魔の力を体に染み込ませていたのだ。

「殺人者……なのよね、私」

自らを殺したいとはいつも思っていたこと。しかし、人を殺めるつもりなどはなかった。少なくとも母親以外は。

柵から身を乗り出し、下を覗き込む。そこは生徒用の自転車置き場だった。そこまでの距離は、頭から落ちれば十分に死ぬことの出る高さがある。

ゆっくりと、ゆっくりと真奈の体が前方に折れていく。このまま柵を越えれば、そのまま頭から落下できるはずである。

「死ぬ気か？」

突然の背後から声に真奈の動きが止まった。

声のした背後に振り向く。

そこには少年が立っていた。黒髪、黒目の少年。やや長めの前髪が目にかかっている。

その容姿に、真奈は見惚れてしまった。少年は作り物かと紛うほどに美しいのだ。

「聞かせる。お前は死にたいのか？」

形の良い唇が動き、少年が再び聞く。

我に返る一言を受け、真奈はそして怒りを覚えた。

少年を無視することを決めると、校舎内部へ続く階段に向けて歩き出す。

その扉は少年の背後にあった。

すれ違いざまに、真奈は少年を睨みつけた。少年は無表情にそれを受け流す。二人が交差する。その直後、少年は左手を伸ばすと真奈の左手首を掴んだ。

少年の左手首にある小さな鈴が微かに鳴った。

真奈は驚き振り返る。少年と視線が交わった。

「お前は死にたいのか？」

少年がもう一度、同じ内容の質問を投げかける。それは夢の男と同じ台詞。

「なんでそんなことアンタに答えないといけないわけ?!」

真奈は苛立った。感情のままに叫んだ。それは夢とは違う返答。

冷静に、変わらぬポーカークフェイスで少年は口を開く。

「答える。返答によつては」

鋭い眼差しが少女を刺す。

「俺がお前を殺す」

少年の言葉を受け、真奈は絶句した。

暫しの沈黙の時間が流れる。雰囲気こそぐわぬ楽しげな声が遠くに聞こえた。

「……殺してくれるわけ？ 願ったり叶ったりよ！ 死にたいわよ

！ 殺しなさいよ！ 殺してみなさいよ！」

沈黙を破り、真奈が喚く。

「……殺してよ……」

そして、懇願し咽ぶ。

涙に歪む真奈の視界、目の前の少年の顔。一瞬、悲しげな表情をそこに浮かべたような気がした。

鈴のある手が、真奈の左手を解放する。少年は真つ直ぐに彼女を見つめる。

「了解した。……覚えておけ。渡辺詩緒。お前を殺す人間の名だ」
泣き崩れる真奈に背を向け、少年は屋上を後にした。

立ち入り禁止の札が下がったチェーンで封鎖された階段の踊り場
そこで屋上から降りてきた詩緒を瑞穂は迎えた。

「自殺願望者、か……道理で抵抗がないわけね……」

自らの意識を消去しようとする魔道に抵抗がない。それは瑞穂が
病院で言ったようにすでにその人格が消滅している、もしくはその
意思がない、ということしか考えられない。

自らを殺そうとしている少女は、それを自我というレベルで実行
してくれることを素直に受け入れたのだ。その体に影の魔道が侵食
し終われば、彼女は「藤川真奈」という存在を殺せる。

二人は真奈について調査していた。彼女を取り巻く環境は決して
良いものではないことを知っている。そして今の彼女はまだ、マナ
の言葉通りに操られている存在であることも確かめられた。しかし
。

「……死ぬことに抗う気がないのなら、あの女は「魔」だ」

それに本当に変わる時は、すぐそこに迫っているのだろう。

詩緒は両手をズボンのポケットに突っ込んで階段を降りて来る。

瑞穂の待つ踊り場に到着すると、詩緒が開いた屋上への扉が閉じ
た音が響いた。

「……だったら、俺はそれを消すだけだ」

その扉を振り向き見上げ、詩緒は呟いた。

第拾夜・悪夢、影に染まる

「これは僕が初めて人を救えたときに、その人から貰ったものなんだ」

微笑み、柗希は言った。

「これが僕が滝口として手に入れた、たった一つの報酬だよ」

続く言葉。滝口はそれを生業として生きているわけではない。彼らは「魔」を狩る力を持っている。だから、出来ることを行っているだけなのだ。

「可愛い幼い少女だった。その子が小さな手で笑顔と共に送ってくれたんだ」

「この鈴を？」

兄に詩緒が聞く。柗希は頷いた。

「それから僕が護ることの出来た笑顔が、そこに詰まっているんだ。

……その鈴は「笑顔のカタチ」。僕の宝物なんだよ」

「笑顔のカタチ、か……」

桐の小箱に収められた小さな銀色の鈴を、詩緒は見つめた。

「詩緒。君に受け取って欲しいんだ」

柗希が告げる。

「……俺には重すぎる」

詩緒は返答した。手にしていた桐の箱を、柗希へと差し出す。

「詩緒。君は友達も作らずに孤独と戦ってきたんだ……君もそうすることで笑顔を守ってきた。だから、詩緒にもそれを受け取る権利があるんだよ」

滝口に近い人間は「魔」の脅威に晒される危険性がある。この時まだ中学校に入学したばかりの詩緒。彼はその危険性を考え、誰とも親しくなることなく生きてきた。

それはあの日の出来事。

詩緒がその左手に在る鈴を手にした日。
そして。

「……でも俺には大切な人を護りながら戦える力もある、か」

あの後、柁希が言った言葉を詩緒は反芻する。

「買い被りすぎだ……俺は未だに無力だ」

鈴を一瞥し呟くと、詩緒は病院のロビーに並ぶソファから腰を上げた。

満月に程近い月が浮かぶ夜。

十三夜月。

満月に次いで美しいとされるその月を、果たして見上げる人間がこの街にどれだけいるのだろうか。

その月の下、真奈は家路に着いていた。

その日の学校の授業は昼から欠席した。屋上で一人考え、過ごしたのである。

母親。父親。生。死。死神。「彼女」。そして、殺害予告をした少年。

気がつけば、午後の授業は終了していた。

その後のことは真奈自身、よくは覚えていない。

いつものように時間を潰すために街を彷徨っていたとは思っ

真奈が自宅のあるアパートへと到着する。築二十年程の古めのアパート。この都市が急激に発展したのは、この土地と都心と繋ぐ私鉄が開通してからである。このアパートは、その当時に建てられた建物ということになる。

灰色の無機質なコンクリート製の階段を上る。入居する家庭の夕食時間は終わっているようである。

それは良い事だと真奈は思う。夕食時は嫌いだからだ。

家庭を感じさせる時間だから。望んでも叶わなかった時間だから。

キーケースから鍵を取り出すと、自宅の玄関の鍵口にそれを差し込む。

ゆっくりと開錠する。

なるだけ音を立てないように扉を開き、中に入るとその耳に嫌な音が入ってきた。

男が女を求める息音。女が男を誘う喘ぎ。

ガラス扉の向こう、薄明かりに蠢く二つの影が窺える。

真奈は二人に気付かれないように、出来るだけ静かに自分の部屋に向かった。玄関から伸びる短い廊下の突き当たりが彼女の部屋である。

「おい？」

辿り着く直前に、男の声がした。

「んっ？ どうしたの？ 啓介？」

女の声が続く。その声の主は真奈の母親、郁子だった。

「そこ、人がいたぞ？」

啓介という男が言う。

「……もう！」

母の声。そして真奈の方に足音が近づいて来る。リビングの照明が灯され、ガラス扉から廊下に光が射す。

「真奈！ アンタ何回、私の邪魔をするの！」

リビングの扉が開くと同時にヒステリックな声がした。キャミソール一枚を纏った、妖艶な女性が真奈の前に現れる。郁子である。

「……ご、ごめんなさい」

真奈は謝罪の言葉を彼女に発した。消え入るような小さな声だった。

「はあ？！ 何言ってるのよ！ アンタ、謝って済むと思ってるの？！」

郁子は言つと真奈の黒髪を掴んで引つ張った。

「邪魔をするなって言ったわよね！ アンタだれのお陰で生きていられるのよ！ 誰の邪魔をしたのよ！？」

郁子が喚き、掴んだ髪で真奈の頭を振り回す。幾度か狭い廊下の壁に、真奈の頭がぶつかる。

ドウシテガマンスルノ？

「え？」

声を聞いた気のした真奈は呟いた。

郁子が彼女の髪の毛を放す。

「部屋に入って出るんじゃないわよ！」

郁子は睨みつけ命じると、リビングへと姿を消した。

モウ欲望ヲ解放シテイイノヨ？

再び声がする。

真奈は呆然と立ち尽くし、乱れた髪をそのままに声を聞く。

私ノ声ヲ聞いて。私ノ声に従って。

「貴女は、もう一人の私？……」

合わぬ目の焦点。声の主、心当たりのある存在。「彼女」。

もう貴女の役目は終わったのよ。私の声に従って。そうすれば……。

「そうすれば……？」

そうすれば、貴女の悪夢は終わりを告げるの。楽になれるわよ、真奈。

ああ、そうか。私はやっと死ねるんだ。

真奈は微笑んだ。

影が激しく動く。彼女の身を下から巻き上げる旋風のようにうねる。真奈を取り巻く、足元から伸びた黒い螺旋。

少女は影の渦の中、妖しく微笑む。

赤い瞳。銀色の髪。

鎮まった影の中央に、真奈の存在していた場所に、マナが立っていた。

啓介が郁子の体をなぞる手を止めた。

「んっ。焦らさないでよ……」

郁子が艶っぽい声で言う。

「おい……止めるよ」

啓介は上に乗る郁子のために身動きが取れず、その視界に入った何者かに請うように口を開いた。

「何？」

郁子が振り返る。そこにはマナがいた。両手にはナイフを持っている。当然それは影で創られた凶器であった。

「お世話になったでしょ？ だからプレゼントよ」

マナが裸で重なる二人を見下しながら言う。直後、刃を投げ放つ。郁子は咄嗟にソファアーベットから転げ落ちて、それをかわした。

鈍い音が二つすると、苦しむ啓介の声が起こる。

「煩いわね」

マナは心底、気に障ったように呟くと、自分の周りの空間に影の刃を幾つも産み出した。

「黙りなさい」

腹部と胸部、二本の影のナイフを突き立てられ呻く男に命じるように発する。そして、産み出した無数の刃をその男を標的にして飛

ばした。

室内に鈍い音が無数に響く。

肉に刃が刺さる音を後方に聞き、郁子は床を這うように廊下の方へと逃げていた。

思うように力が入らないのか、なかなか前方には移動出来ずに、じたばたと無様に肢体を動かしている。

「待ちなさいよ」

郁子に声がかけられる。その声は彼女の娘と同じものだ。

「な、何？」

郁子がマナを見上げる。

「貴女、楽には殺さないから」

残虐な笑みを浮かべる。その顔は彼女の知る娘のものではない。自分に怯え、顔色を窺ういつもの娘のものではない。

マナの影が郁子を包む。

「あ、熱い！ いやぁ！」

続く悲鳴。

その悲鳴を心地よさそうに暫くの間マナは聞いた。

郁子の体を拘束していた影が、解放する。焼け爛れた醜い郁子の姿がそこにあつた。

「痛い、痛い、痛い、痛い……」

のたうちまわる女の様子を、マナは声を出して嗤った。

「お似合いよ！ 御覧なさい！」

残ったざんばら髪を掴み、ガラス扉に映るその顔を郁子に見せる。つい先程までそこにあつた妖艶な魅力に溢れた顔はそこにはなかった。熱に爛れ、醜く変形したおぞましい顔がそこに映っていた。

「あ、あ、あ、あ。私の顔が……」

郁子が悲痛の声を上げる。それは低い呻き声に変わっていく。

「真奈、許さない、許さない、許さない、許さない、許……」

憎しみが彼女を支配していく。

「殺してやる。殺ろしてやる。殺ろしてやる。殺ろしてやる。殺ろ

してやる。殺……」

郁子の体に瘴気が帯びる。それを感じて、掴んだ髪を放す魔人。郁子の体が変形していく。肉が膨張し、収縮し、骨が軋む。

咆哮を上げて、身を起こす。

その身は元の姿よりも一回りも二回りも大きい。大型の霊長類のようなシルエットである。しかし、皮膚は赤みを帯び、人に似て薄い体毛だった。

ざんばら髪 of 頭部に角が一本、窺える。

それはこの国に古来より伝わる化け物そのものの姿に他ならない。丸太のように太い腕を振るい、背後のマナを郁子だったものが襲う。マナは跳躍しそれをかわす。振動を起こし、その腕は壁にめり込んだ。

マナと正面から向き合った化け物。

涎が顎のラインに沿って地に落ちる。口が顎の付け根まで裂けている。大きく発達した犬歯が口内に収まりきらず、閉じられた口から見えている。潰れた鼻。白目を剥いた大きく開かれた目。そして頭部の角。

それは、鬼だ。

人は暗く醜い欲望に囚われると、その果てに鬼に変わる。言葉の文ではない。それは事実なのだ。

藤川郁子は鬼に堕ちた。憎しみに囚われ鬼に成り果てたのだ。

「貴女らしい最後よ！ 無様ね！」

マナは目の前の鬼を嘲笑した。

鬼が踊りかかる。

ガラスの碎ける音が月夜に響いた。二人の女だった「魔」が夜闇に舞う。

十三夜月。

満月に次いで美しいとされるその月を、この街で見る者が二人。

それは二人の黒衣の男。

「刻は来た!」

高層ビルの屋上。魔人・御影司郎はマナの覚醒を感じ謳う。

「目覚めたか……」

男の眠る病院の屋上。滝口・渡辺詩緒は影の魔道の気配を感じ咳く。

月はただ、いつものように夜を照らしていた。

第拾壹夜・悪夢は月夜に躍動する

夜の住宅地を駆ける二つの影。

マナは誘われるままの方角へと向かっていた。一直線に目的地へと赴く。壁を蹴り、塀の上を疾走し、屋根を跳ぶ。その後にいる鬼も巨大な体躯に似合わず、その動きに遅れることなく追走していた。後方に迫る鬼。身体能力自体はおそらく、その化け物の方が一枚上手である。身軽さという一点で勝るマナが偶然にも進んでいる、起伏に富んだルートが元は二人の女だった「魔」同士の距離を縮めずにいた。

鬼には生まれながらの純血な鬼と、人を始め後天的に別の存在から変じた鬼との二種が存在する。当然、マナを追う鬼は後者である。変じて堕ちた鬼の能力は個体により大きく異なる。藤川郁子が成り果てたその鬼は、言わば獣に過ぎない。肉体的能力では優れているかも知れないが、言葉を解せず、本能のままに獲物を狙うだけの魔獣であった。

余裕のあまりない状況。しかし、マナは嗤っていた。

鬼に堕ちた無様な女の様を、嘲笑っているのだ。その姿にかつて女が自慢にしていた美貌の名残は欠片もない。

目的地は近い。彼女を呼ぶ者の気配は、もうすぐそこである。

マナを呼ぶのは、彼女と同じ魔道の波動を放つ者。視界に入った公園の一角にいるようだ。

「すぐに弄り殺しにしてあげるわ」

鬼をちらりと見直して、マナは口元を歪め呟いた。

「詩緒！」

扉が開き病院の屋上に、彼を呼ぶ声がした。

「感じた!？」

現れた瑞穂は、詩緒の姿をそこに見つけると聞いた。

「ああ」

彼女のいる入り口へと向かいながら、滝口はぶっきらぼうに短く返答をよこす。

「3つ、よ？」

瑞穂は感知した「魔」の気配の数を確認する。

「ああ。解っている」

詩緒もそれを感じていた。

「だったら、何ぐずぐずしてるのよ！」

言うなり、振り向こうとする瑞穂。その動作を詩緒は彼女の白く細い腕を掴んで制した。

「何!？」

瑞穂が驚きを口にする。

「お前に頼みがある」

詩緒は言う。それは到底、人にものを頼む態度ではない。しかし、長い関係を持つ瑞穂でさえも、彼が他人にものを頼む姿を見たことはなかった。だから、彼女はとりあえず、彼の願いを訊ねていた。

「アンタねえ！ 人にものを頼むなら、それなりの態度つてものがあるでしょうが！ ……で、何なのよ?!」

だが、一刻を争うこの事態にあっても、文句を言うことを忘れはしない。

詩緒の口が開く。

そこから語られる滝口の少年の台詞を、なんとなく、彼女には予想が出来ていた。無愛想だろうが、言葉使いは横柄染みていようが、この少年の根底にあるのは他人を思う優しさなのだ。

少年の目は真っ直ぐ少女に向けられていた。

「……貸しーつよ」

詩緒の願いを聞いた瑞穂は、短くそう告げる。

「解った」

瑞穂の言葉を快く了解すると、詩緒は颯爽と駆け出した。

滝口は決戦の場を目指し、単身で出撃したのだ。

「……自分を危険に晒してまで希望にすぎる、か。……甘いわね、本当。でも詩緒らしいわよ」

瑞穂は姿の見えなくなつた滝口にそう呟いた。

大きな円形の噴水を中心に設けた、公園の広場。この都市で一番大きな公園の一角。

御影はその場所に一人、佇んでいた。自分の宿る新しい肉体の到着を待っているのだ。

辺りはこの時間に、この広場に居合わせたという共通点を持った死体が複数転がっている。

流れる薄雲に隠れ、一瞬、月が陰ると、男の視線のある方向で女の笑い声と獣の咆哮がした。それは御影の新しい器たる少女と、憎悪に狂つた鬼のものである。

「ほう」

御影は器たる少女を追撃していた鬼を見て、声を漏らした。滝口から「魔」として扱われる男ではあるが、己以外の「魔」たる存在を見たことはなかった。

「……あれが、鬼か」

それは日本画などで見られるものと、身体的特徴は見事に一致していた。相違を挙げるなら、実物は絵に見られるような愛嬌を感じさせる部分はない。隆々たる肉体、恐ろしい形相、獲物を見据えた目などは、畏怖の念を抱かせるに十分である。

「面白い」

御影は黒いコートを腕で払い捲り、標的にその右手をかざした。

鬼を狩るべく、その掌に魔弾を産み出す。

鬼の体から発せられる邪気は魔人を歓喜させた。

あれ程の力ある存在を影へ取り込めば、どれ程の魔力に変換できるであろうか。

魔弾を発射する。それは唸りを上げて鬼に迫る。御影の狙いは正確に目標の体を捉えていた。着弾し、その左肩をえぐる。鬼は痛みを感じてか、大きく吠えた。

したり顔で、とどめとばかりに魔弾を放つ魔人。

しかし、二射目は鬼の体の直前で防がれた。遮ったのは器たる少女の影から発生した黒い障壁。マナの影の障壁がそれを吸収したのである。

「何!？」

驚く御影は、その直後、殺気を感じてその身を後方へと滑らせた。氷上を滑走するように地面に伸びた影の上を滑る。御影の体が在った場所に、後から後から黒い刃が突き立っていく。攻撃が止むと同時に、御影の身は静止した。

「どういうことだ？」

怒りを押し殺し、影の魔人は冷淡な口調でその身を襲撃したモノを見上げ問う。

外灯から舞い降りると、問われたモノは妖しく笑った。

「それは私の獲物。手を出さないで欲しいわね」

言い放ち、冷やかな鋭い視線を御影に送る。

「ほう……」

感情はすでに隠せるものではなかった。マナの言葉が魔人の表情を怒りに歪ませる。

二人の影の魔人たる存在に割って入るように、鬼は空気を震動させるほどの雄叫びを上げた。そして、体軀からは想像できない驚異的な速度で背を向けたマナに接近すると、頭上から太い腕を振り下ろす。

「せっかちな」

マナは余裕でそれを回避し、宙に舞った。

「器たるモノに、新たな人格が形成されるとは予想外であったが……
…良かるう」

マナと鬼。一連のそれらの動きを見ながら御影は独ごつ。

「屈服させるも一興」

御影の言葉と同時に地面へ叩きつけられる鬼の太い腕。衝撃音と土煙を上げて、その剛腕がタイル張りの地を砕く。地が揺れる。

その瞬間、宙にあるマナの体。それを嘲笑い御影は魔弾を連発して射出した。空中で避けることの叶わぬ状況に置かれたマナは、右手を振るうとその軌道に三日月型の刃を生じさせる。生じた勢いのまま、黒い三日月は御影を襲う。飛び来る魔弾を裂きながら魔人へ迫る。

御影は高笑いを上げつつ、影で障壁を形成し、魔力の波動たる三日月をそこへと吸収させた。

影の魔道同士、障壁を形成されれば飛び道具は無力化される。悟り、マナは着地と同時に死神の大鎌を具現化させ、魔人へと強襲した。迎え撃つ御影の影からは、呻き声と共に無数の黒い腕が伸びる。それらは、地獄の底から這上がろうとする亡者の腕のように、幾つかは地に縋り（すがり）引き摺った指跡を産み、幾つかは空間に掴み継るものを探すように蠢く。薙がれたマナの大鎌はそれらを切り裂くが、いずれ柄といわず、刃といわず、腕といわず、体といわず、掴みマナを拘束する。

マナの体の至る箇所を掴んだ無数の黒い腕。そして、それらは地獄に道連れを求める亡者たちの呻きのような声を発しながら、彼女の身を影の世界に引き込もうとする。

二人の魔人の攻防を、土煙の中から窺っていた鬼が咆哮した。身動きのとれないマナに踊りかかる。

「チャンスだとも思ったのかい！？ 阿婆擦れ（あばずれ）！！」
ざんばら髪を振り乱し接近する鬼。それを睨むと怒号し、マナは自分の周囲を囲むように、影からその身長を遙かに凌駕する漆黒の刃を次々と創造した。生み出される大きな両刃の刀身。それは天を突くようにそびえる。あたかもその様は、刃で作られた牢獄に囚われている少女のようにも映る。しかし、刃は凶悪なまでの力を示し、彼女を堅守した。マナを掴んでいた亡者の手を全て切断すると共に、

襲い来る鬼を迎撃し、その腹部に深々と突き刺さる。

鬼の血を浴び、マナは残虐に高らかと笑った。

「ほっ」

短く感嘆し、御影は彼女と距離を作る。

「なるほど。これは立派な依代になったものだ……」

そして、呟く。

「潰れた箇所は再生すればいいだけのこと……それ相応の相手をしてやろう」

続け言葉を放つと、御影は魔力を解放した。

その凶悪な禍々しい魔力の波を受け、しかし血塗れのマナは嗤う。

「貴方はもう用済みなのよ……影が選ぶのは私。教えてあげるわ」

「ほざくな！」

御影が叫んだ。直後、マナの背後の鬼が絶叫した。剣に串刺しにされ、宙にあつたはずの鬼。その化け物は体を貫いた刃を力任せに折り、束縛から解放されていた。着地と同時に、鬼は力の限り拳を振り動かす。鈍く低い打撃音が響いたと同時にマナの華奢な体が弾き飛び。

慣性に従い、噴水の中央に飾られた石柱のオブジェに叩きつけられる少女。その身が砕け散りそうな衝突音を発生させると、そのまま飛沫を上げ着水した。喀血された赤が水面に混ざる。

鬼は唸り、噴水に向かい突進した。えぐられた肩も、臓物の漏れた腹も、支障を感じさせることはない。鬼は跳ぶ。冷たい光を放つ月を背に。異形の影は月夜に舞う。獲物に引導を渡すべく。獲物を喰らうべく。

月影を反射した一瞬の閃き。

ふらりと立ち上がったマナの前に降り立っていたのは、異形ではなかった。

彼女を襲った鬼は首を刎ねられ、まさに今、塵と化している。

「此の世ならざるものは、塵に消えるのみ……」

そこに背を向け、立つのは滝口の少年。

滝口は振り返り、意識を取り戻したマナの喉元に鬼を排除した刀の切っ先を突きつける。

喀血したものとも、返り血とも解らぬ血に塗れたマナの顔。詩緒はその彼女の顔を真っ直ぐに見た。

「もう一度聞く。……藤川真奈。お前は本当に死にたいのか？」

夜風に鬼は芥あくたと散り、静かに鈴が鳴り響いた。

第拾貳夜・男、影に向かう

「もう一度聞く。……藤川真奈。お前は本当に死にたいのか？」

水面に浮かぶ十三夜月、滝口、影を操る少女。噴き上げられた水滴が弧を描いて落ちると、波紋が広がり、映し出されたそれらが揺れる。歪む。

水音が止み、訪れる刹那の静寂。

マナは口にあつた血を吐き捨てて、そのしじまを破った。

「……馬鹿な事を言うのね。その娘はもう存在しないわ。解っているんでしょ？ 此処に居るのは、私だけ。新たなる影の後継者、御影マナだけよ」

少女は滝口を見下した様に笑いながら言う。その顔に浮かぶ汗。胸を押さえ、苦しそうに呼吸をしながらも、自らを誇示するがごとく笑う。

「お前には何も聞いていない」

言葉を受けた滝口の少年は、喉頸のどくびに刃を向けた魔人たる少女に、ただ冷淡に語る。

マナは詩緒の言葉を鼻で笑った。

「……応える者はすでにいないと言っている！」

そして、痛みを浮かべながらも叫んだ。声と共に、水面を裂いて影から柱が伸びる。それは鬼の腹部に突き刺さったものと同種の両刃の刀身であつた。

敵を串刺しにしようとした巨大な影の剣を、詩緒は瞬間、察知して跳躍していた。

僅かに感じた魔力の動きを読んだのだ。

「……滝口。それは私のものだ。勝手をされては困る」

水面から着地した詩緒の背後に、静観していた御影が動く。

「そして告げたはずだ……その命、次の機会まで預けておくと！」
その影から少年を一呑みにするほど巨大な肉食獣の頭部が生まれ、

牙を剥く。

すでに抜き身となつてゐる刀を袈裟に振るい、それを斬り捨てると同時に、詩緒は御影の気配を追つていた。

「今宵、貴様に引導を渡してやろう！」

滝口の死角から起こる声。

「こちらの台詞だ」

詩緒は呟き、上体を反らすと、死角から飛来した魔弾を避けた。回避運動の流れの中で、体勢を整えつつ、死角に在る「魔」に切っ先を突き出す。

金属同士が弾き合うような高い音が三度、辺りに響いた。

初めて黒衣の二人が相對した三日月の夜のように。滝口の刀の剣尖を、魔人の影が遮つていた。

「……あの体勢から神業を放つか、滝口」

御影は嗤う。

「邪魔をするな」

御影の言葉を無視し、自分の都合を押し付けるように詩緒は相手を睨みつけ言い放つた。そして、地を蹴る。結果、二人の黒衣の男を別つように、マナの大鎌が空を裂いた。

「お得意の抜刀術は使わないの!？」

マナは魔力を使い肉体再生を行なつた直後、滝口を強襲したのだ。脅威的な回復能力であつた。

「ほう」

御影は満足そうに声を出した。折れた肋あはせが肺に刺さつていたはずである。それを僅かな間に回復させたのだ。

「人の得手不得手を勝手に決めるな」

着地際に詩緒はマナの問いに独りごちた。

「助けてくれたお礼をさせてもらうわ！」

マナが詩緒を追い、地を蹴る。大鎌を構え迫る。その背後で御影は魔弾を複数発生させていた。それは詩緒からは死角になつてゐる。しかし、それも詩緒は把握してゐた。生じた魔弾の個数まで感知

している。

渡辺詩緒という滝口の強さは状況把握能力、反射能力にある。この少年は僅かな殺気、魔の波動といった超感覚的な要素を含め、筋肉の動き、呼吸音といった視覚、聴覚などの全ての感覚が感知する外的要素を瞬間に把握し動いているのだ。抜刀術が不得手なわけではない。しかし、その技は詩緒が最も得意とする戦術には不適切であるのだ。抜刀術のように間合いを測らせずに先の先を狙う戦い方では彼の能力は最大限には生きない。現在の状況、情報を基に最善の策を選択し、瞬間的に行動に移すこと。後の先を取ることが最も得意とする戦い方なのである。

そういう意味では戦況は、まだ他の滝口よりは有利であった。ただそれは、他の滝口よりも、多少長く粘ることが出来る程度のものである。二人の魔人を同時に相手にすることは、やはり非常に厳しい状態であった。

敵を滅するだけの戦いであるなら勝機も見えるかも知れない。だが詩緒は僅かな希望に賭けたのだ。

二人の影の魔人は連携を取り始める。前衛をマナが担当し、後衛を御影が務める。共通の敵を先に始末することを選択したようだ。対する滝口の少年が、倒すべき敵としているのは御影司郎だけであった。鎌を振るい襲い来る少女の中には、まだ藤川真奈が生きると詩緒は信じている。

止むことのない激しい攻撃に耐えながら、その体に傷を少しずつ増やしていく。

だが滝口の目はまだ、しっかりと正面に向けられていた。

「真奈を本当に私が救えるのでしょうか？」

病院の屋上で本田は聞いた。不安は明らかに表情に現れている。

「貴方にしか出来ません」

その問いに、きつぱりと瑞穂は告げた。

「……だから貴方はここにいるのでしょうか？」

そして、そう続けて、男に微笑んだ。

本田は真奈を捨てたわけではなかった。幼かった真奈の親権を巡って郁子と争い、敗訴したのだ。

その大きな要因は彼の仕事上の問題にあった。その当時、事業に失敗した本田には僅かな稼ぎと莫大な借金しかなかったのである。

愛する我が子と会えない生活。それでも本田は自分を犠牲にして、真奈のために郁子に送金を続けながら懸命に働いた。真奈に会いたいという想いも封印し、満足に食事も取らず、その費用まで娘の未来のために回してきた。

苦勞の甲斐があつてか、ここ数年で仕事は順調になり、借金の返済の目処も立った。

ゆとりの出てきた本田は探偵を雇い、愛娘の近況を調査させた。月々の送金の確認を兼ねた、郁子からの報告の手紙には真奈についてのことはほとんど書かれていなかったのだ。

郁子の性格は知っている。男なしの生活などは送ってはいないだろう。新しい父親が出来ていて、真奈が幸せであるのならば自分も名乗り出る必要はない。本田はただ、彼女の近況を知りたかった。

娘の幸せだけを願い、それだけを希望に必死に生きてきた男の想いを、しかし、現実には残酷にも打ち砕く。

郁子のもたらした真奈を取り巻く環境は、幸せなどとは縁遠いものだった。

改めて争つても、自分が真奈を引き取りたい。そう考え、彼はこの遠い街を訪れたのだ。

「真奈さんが戦っているのは、貴方の知らない非日常の世界とです。凜とした声で陰陽師は語る。

「その世界に足を踏み込むというのならば、残念ながら、身の安全を保障することは出来ません」

本田は唾を飲み込んだ。そう話す美しい少女の顔には冗談の類は

感じられない。自身もその世界を垣間見た。彼女たちのいるその世界は、常に死と隣り合わせにある世界なのだろう。

瑞穂は真奈が現在置かれている状況を包み隠さず、ありのまま本田に伝えていた。

本田もそれを信じた。娘の状況を伝えた少女は、不思議な力で重傷だった己の体を短時間で動けるまでに回復させたのだ。それが彼女の言う、「非日常の世界」の力の一端なのであろう。

「もう一度、確認させて下さい。……それでも、貴方は真奈さんを救いたいですか？」

瑞穂は本田を見た。眼鏡の奥の瞳に、迷いはない。

「はい」

病室で聞いたときと同じく、力強く頷いた父親。もう一度、瑞穂は微笑むと、その左手に呪符を構えた。

右手人差し指と中指を呪符に当てる。その二つ指先で、ゆっくりと晴明桔梗せいめいききょうを描く。

晴明桔梗。セーマンと呼ばれることもある陰陽道の代表的呪術図形、五芒星である。これは陰陽五行の相生・相剋そうじょう・そうこくの理を示す図形である。

木生火、火生土、土生金、金生水、水生木。（もくしょうか、かしょうど、どしょうこん、こんしょうすい、すいしょうもく）

木は火を生み、火は土を生む。土は金を生み、金は水を生む。そして、水は木を生む。五行相生とは、自然はめぐり生まれるという循環の理である。

木剋土、土剋水、水剋火、火剋金、金剋木。（もつこくど、どこくすい、すいこくか、かこくこん、こんこくもく）

木は土から養分を吸い取り、土は水の流れを止め、水は火を消し、火は金を溶かし、金は木を切る。五行相剋とは、自然の闘争関係の理である。

彼の偉大なる陰陽師、安倍晴明の家紋でもあるその五芒星。その頂点は、それぞれ五行の一つ一つを示しており、まさに陰陽五行の

象徴たる図形なのである。

多くの陰陽師はこれを魔力行使のスイッチとして利用する。通常
の感覚から、五行の力を感知し行使する状態に体をシフトする起点
である。

しかし、加茂瑞穂という陰陽師にとっての清明桔梗はスイッチで
はない。彼女が稀代の陰陽師と呼ばれる所以は、意識せずとも五行
の力を感知し行使できるからなのである。

瑞穂にとってのそれは魔力増幅であった。

陰陽師は符を放つ。

「舞え！ 鳳よ！」

魔力を受けた呪符が大きな鳥へと変じる。それは五彩の色を持つ
美しい鳥。鳥の王。鳳凰であった。瑞穂の式神である。

瑞穂の前に舞い降りる霊鳥。開いた口をそのままに、その幻想た
る大鳥に目を奪われ本田は立ち尽くした。

「貴方が覗くのは、こういう世界です。とりあえず、急ぎましょう」
瑞穂は本田の手を引くと、その背に乗った。鳳凰は二人を乗せて
舞い上がる。

五彩の羽根を羽ばたかせ、月夜に霊鳥は飛翔した。

一瞬の間隙をついて、マナの横を詩緒はすり抜けた。魔人の少女は
完全に回復したわけではないようである。まだ動作に痛みを伴うた
めか、動きに生彩を欠いていた。

対する詩緒も、致命傷は避けているものの、その体の様々な部位
に負傷を負っている。しかし、この程度の外傷で済んでいるのは、
むしろ幸運であった。三人の姿のある公園の広場はすでに原型を留
めてはいない。噴水は決壊し、外灯は斬り倒され、地面に幾つもの
穴を穿っていた。魔人たちの攻撃は凄まじいものだったのである。

詩緒はマナをかわすと、御影との距離を一気に詰めた。

「往生際の悪い」

勝利を既に確信し、ほくそ笑む御影。

その影から産まれたのは、マナを捕えた亡者たち数多あまたの腕。

「くっ！」

短く叱責が詩緒の口から漏れる。焦りが冷静な状況判断を誤らせた。

今は共闘するもう一人の影の魔人のときと同じく、滝口を伸びた無数の手が掴み、捕らえる。

「終局だ」

醜く御影は笑った。

捕縛された少年の背後にデスサイズを携えたマナが迫り、目の前の魔人は魔弾を射出するべく構える。滝口の唯一の武器である刀は、その身と共に完全に自由を奪われていた。

詩緒は一切の抵抗を止めると、静かに目を閉じた。

第拾参夜・悪夢は夜に醒める

二人の魔人が敵を葬るべく動く。対象である滝口は抵抗を止めていた。

詩緒は死を享受したのだろうか。否。事態が好転することを知っているのだ。

一陣の風が舞う。そして、うねりを上げる。

詩緒を中心に巻き上がる大気。竜巻が突如、その公園の広場に発生した。

滝口の前にいる御影を、迫るマナを吹き飛ばす。詩緒の体を呪縛している影の腕々を切り裂き、轟音の中に掻き消す。

発生した時と同様に不意に風が止むと、大気は静けさを取り戻した。不可解な自然現象の中央にいた詩緒はそれによる被害を一切受けず、何事もなかったか様に立っている。

月影を遮り、天から降臨する美しい霊鳥。

「木行、風気を以って……ってね。詩緒、貸し二つよ」

鳳凰が滝口の横に舞い降り、その背の陰陽師の少女は詩緒に右手の指でその数字を突きつけウインクした。

「遅かったな」

助けられたことには触れもせず、詩緒は瑞穂に言った。詩緒には瑞穂の到着が解っていたのだ。

「……アンタ、あの状況で助けられて、感謝の言葉も言えないの？」

「……」

瑞穂は鳳凰を呪符に戻しつつ、眉間に皺を寄せる。

「戯言は後で言え。それよりも現状打破が先だ」

この少年の後で言えとは、後で一人、勝手にほざいていると同義である。

「……なんか引つ掛かるけど、まあ、そうね。詩緒、依頼の本田さんを連れて来たわよ」

瑞穂が本田を詩緒に紹介した。

「真奈は!？」

本田はしかし、マナの飛ばされた茂みの方へと、意識を送っていた。そして、その方向へと走り出す。

「あら」

本田の行動に、瑞穂は短く声を漏らすと、

「アンタはそつちをよろしくね。私はあっち」

と、手早く指示を出した。人差し指で自分の担当する相手を指し示す。

そして、滝口の答えを待たずに、陰陽師は事の元凶たる影の魔人の方へと向き直った。

詩緒の近くにいた御影は、強風に巻かれながらも影の魔道を行使し被害を抑えていた。

黒衣についた埃を払い、先程まで自身のいた場所に視線を送る。

そこからこちらに向かって来る、一人の少女。武器は所持していない。

「私が相手よ」

彼女はそう告げ、適当に距離を取った場所で立ち止まった。

「甘く見られたものだ……」

自らの前に立つのが滝口ではなかったことを侮辱と感じてか、魔人は怒りの双眸を少女に遣る。

「怪我人の相手を、怪我人にさせるだけよ」

瑞穂はその視線に怯むことなく受け流すと、ジーンズの後ろポケットから数枚の呪符を取り出した。

「断つとくわね。端から魔力解放して、全力で来なさい。余裕かますと瞬殺するわよ」

言いつつ笑みを浮かべる。

御影の眉がぴくりと動いた。

「ほう……どうして私が全力でない？」

「陰の気の動きが歪いびつなのよ。発生させる事象とは明らかに違う魔道の流れが生じている。無理に制御してるでしょ？」

瑞穂は笑顔ながら、魔人に冷ややかな視線を送る。

「なるほど」

「……さつき、一瞬、解放したみたいだけど、すぐに引つ込めたわね……肉体の崩壊が近いとか、フルで魔力を稼働させると寿命が縮むとか言うんでしょ？」

「……面白い女だ。魔道師か……」

御影が身構える。

「陰陽師よ。たぶん面白くなくなるわよ」

瑞穂は呪符を放ると同時に駆け出す。

「舞え！ 隼よ！」

舞う符は宙で隼へと変じる。式であるその勇ましい狩人と陰陽師は魔人へと仕掛けた。

走り出した本田は警戒することなく目的の方へと近づく。相手は一度、自分を殺そうとした存在である。しかし、父親は娘の安否だけを考え危険性を考慮していない。子を持つ人間の性であろうか。

「真奈！」

本田は周りを見渡ししながら、探す少女の名前を叫ぶ。

声に反応してか、茂みから飛び出す少女。

「真奈！」

自分の呼びかけに娘が応じてくれた喜びが、その声に、表情に出ている。

しかし、少女は藤川真奈ではない。男の呼びかけに反応したわけでもない。

その手に握られるのは大鎌。夜を舞う死神が男に死を与えるべく、月を背に現れたただけだ。

今の彼女は影の魔人、御影マナのだから。

「わざわざ殺されに来たの!？」

マナが本田を急襲する。振り下ろされる影で形成された武器。追って来た詩緒は本田の前に立つと、それを刀で受け止めた。

「真奈! 聞いて欲しい!」

すぐそこにいるであろう我が子に語りかける声。

「命乞いをかしら!？」

大鎌の柄に力を加えながら、マナは嗤う。

「藤川真奈……お前は逃げただけだ」

顔を付き合わせた少女に眩き、詩緒は刀を傾けると大鎌の刃を流した。重心に狂いが生じ、体勢を崩すマナ。勝負を決する隙が生じる。命を奪うことが目的であったならば、すでにこの魔人の首は刎ねられていただろう。

「お前は自分を取り巻く状況と精一杯、戦ったのか？」

詩緒が魔人に突き付けたのは、刃ではなく言葉だった。

「ちっ!」

呻き、マナは横に跳躍した。着地するなり滝口を睨む。人間に手心を加えられ、その屈辱に妖艶な唇を噛む。

「……この身体の元の持ち主が生きているとも思っているのか？」

「滝口!」

屈辱は怒りに変じる。対峙する魔人たる少女と滝口。

「逃げるだけの人間は、差し伸べられた手に気付けはしない」

しかし、マナの言葉を無視し、詩緒はまたも真奈に語る。

「貴様!」

怒りのままにマナは滝口に魔弾を速射した。だが、冷静さを欠いた攻撃は滝口には通じない。連続で射出される後続の凶弾も危なげなく回避しながら、詩緒がマナに迫る。斬間に入るや刀身を走らせる。そこに殺気はない。

「思い出せ。お前に差し伸べられた手があるはずだ」

刀を振るい、突き出す。その流れる太刀ゆきは魔人を釘付けにする。

るためのもの。

「真奈。覚えていないだろうけど……私は君の父親だ……私の話を聞いて欲しい」

少年と殺陣を繰り広げる少女に、本田はゆっくりと語り始めた。

「……真奈。私は君を迎えに来たんだ」

「煩い！」

その声を拒絶するようにマナは怒鳴る。

だが、本田は臆することなく続けた。

「……お前を救えなかった父を許してくれとは言わない。償いをさせて欲しい……」

「黙れ！」

怒号と共に影から幾筋もの両刃の剣が産まれる。

「くっ！」

詩緒はその刃を避けるべく、後方へ跳んだ。

「お前、うざいんだよ！」

滝口の攻撃から解き放たれたマナは、男に言葉と共に大鎌を放った。風切り音を発生させ、大きな弧を描きながら男に迫る。

だが、本田は目を閉じはしたが、その凶刃を避けはしなかった。

「ぐうっ！」

苦痛の声を上げる。

直情で投げられたそれは直撃をせずに、本田の腕を裂いて後方へと飛んでいく。

「……私と一緒に暮らそう。これからは私に真奈を守らせて欲しい……」

目を開くと、傷口を気に止めず、痛みを浮かべながらも本田は言葉を紡ぐ。

「まだ戯れ言を言うか!？」

強敵の存在を忘れ、無防備にマナは癪に触る男に踊りかかる。再びデスサイズを創り出し駆ける。

詩緒は再度、マナと本田の間に立つとそれを受け止めた。

「……この男は戦っている。命を賭してお前を救うために……」

「滝口！ お前もだ！ 二人とも消える！」

影から次々と空間に産み出されるナイフ。

詩緒は舌打ちをすると、魔人の大鎌を往なした。そして、本田を突き飛ばす。

幾つものナイフが発射される。刀で弾けるものは弾くも、滝口の体に突き刺される複数の影の短剣。

ナイフの乱射は止んだ。

少女の高笑いが起こる。

「馬鹿ね！ そんな価値もない男を庇うから！」

傷付いた詩緒をマナは嘲笑う。

「君！？」

本田が状況を把握し、尻餅を付いたまま詩緒を見た。

額に、頬に、首筋に。体の至る箇所にも黒衣を裂き、産まれた裂傷。左腕と右腿と腹部に刺さったナイフ。血達磨になった少年の姿がそこにあった。

満身創痍の状態で詩緒は口を動かさず。尚も真奈に語りかける。

「……解るだろう？ 藤川真奈……お前は一人じゃない……」

「！」

言葉を発せず、マナは逆上し鬼の形相を浮かべる。

鎌を振り上げ、単調に真っ直ぐと振り下ろす。

「真奈！」

渴いた音がひとつ、辺りに木霊した。

マナの頬を打った本田の掌。

軌道がずれ、詩緒の右肩に埋まる鎌の刃。

詩緒は頭を垂れた。体がふらつく。全身の至る場所から流れる血が足元に落ちる。

「私は……私は……御影マナだ！」

マナは腕を振るい、本田を払い飛ばした。

「私は！ 私は！」

マナの目に涙が浮かぶ。影が揺らめく。

「……もう一度聞く……藤川真奈……お前は本当に死にたいのか？」

「……」

詩緒は呟いた。

「私は……私は！」

紅い目から涙が溢れる。

「私は生きたい！」

マナは、いや、真奈は泣き叫んだ。魔道に侵された影が霧散する。涙に溢れた紅い瞳は黒く染まる。髪の毛が黒く変色していく。

倒れようとする真奈を本田は支えた。

「……真奈！」

「……お父さん……」

親子は抱き合い、再会を果たした。

詩緒は薄っすらと笑い、崩れ、地に両膝を付いた。

「あつちは終わったようね」

マナの魔道の波動が消えたことを感じた瑞穂は、余裕を見せて笑った。

「ちい！」

御影は襲い来る隼を払い、その式神を操る陰陽師へ魔弾を放つ。

「残念ね」

魔弾の軌道を読み、舞うように瑞穂は回避した。

詩緒と実戦訓練を行ってきた少女である。その体捌きは一流の域にあった。

お返しとばかりに、陰陽師は呪符を魔人に放つ。

「爆！」

魔力を込められ発動を命じられた符が爆ぜる。その符には火行の力が封じ込まれていた。

急急如律令の呪文と共に、呪符にはすでに陰陽道の秘術が籠めら

れている。後はキーとなる言葉と僅かな魔力を籠めれば効果を発動するのだ。

「ぐうつ！」

爆風にやられ、御影の右腕が飛ぶ。

「金行を以って水行を生ず、水行を以って火行を減ず……」

爆炎が起ると同時に瑞穂は詠唱を開始していた。清明桔梗を描きながらの五行行使。呪符による攻撃はあくまで牽制。魔力を増幅させて、強力な一撃を見舞うための布石。

金生水。金行を以って大気にある水分を増加させる。

水剋火。大気の火行の力を抑え、温度を急激に下げる。

複合の五行秘術。

「凍結せよ！」

呪文の完成。生じる事象の宣言。御影の周囲の大気が一瞬にして凍りつく。

避けることも、断末魔を叫ぶことすらも叶わず、影の魔人は巨大な氷柱に封じられる。

「言ったでしょ？ 本気を出さないと瞬殺するって」

氷の棺にある御影を瑞穂は嘲笑した。

魔人の影の世界。意思を持つ闇は未だ蠢いていた。自らを存続させるべく、不甲斐ない術者に強制的に力を送る。その世界に浮かぶ人の亡骸が一斉に赤黒い煙を発する。

まだ死闘の幕は降りてはいなかった。

第拾参夜・悪夢は夜に醒める（後書き）

＜解説・陰陽道用語＞

急急如律令：「急ぎ、律令の如くすべし」の意。陰陽道で常用されるの呪文の一句。

第拾四夜・人、影に抵抗する

陰陽道に於いて陰と陽は相對するもの、流転するもの。

例えば揺らめく蠟燭の灯。闇にあるそれは陽。しかし、太陽の光の下では陰。人の命も然り。生という陽は死という陰に移ろう。

月明かりは夜の世界では陽たるもの。しかし、今宵のその光は生者、陽たる彼らを拒絶するかのように冷たく照らす。

月光は影を産む。

今の彼らにとっては、影は死を運び来るもの。

影の呪まじに侵された少女は震え、父親の前に寝そべり、影の凶刃に深手を負った少年は、もう一人の少女に治療を施されていた。

渡辺証希。

詩緒の理解者であり、目標であった稀代の滝口。

死に至る病に伏せ、それ故に友を止められず、助けられず、そして。

詩緒の脳裏に兄が過ぎるのは、彼こそが少年にとっての「死」という事象の象徴だからかも知れない。

ふらりと滝口が立ち上がる。

「危なかったわね、詩緒」

瑞穂は詩緒を見上げた。彼女が撫物なでものを行い、死の淵から少年を救ったのだ。

「……ああ」

短く返答し、意識を失っていた少年は左手を開き、閉じて握力を確認する。

「終わらせたわよ……何も今すぐ戦いが始まるワケでもないし、少しは休めば？」

瑞穂はため息を吐いた。

「……渡辺、君……」

本田の前に横になる真奈は、動きだした詩緒を見て口を開く。

真奈の顔には大粒の汗が幾つも浮かんでいた。影の魔道は未だ彼女を支配すべく呪いを継続しているのだ。

少女は今、初めて自分の意志で死と戦っていた。

「……ごめんなさい……ありがとう……」

真奈が消え入りそうな程、小さな声で言う。

「俺は何もしていない。お前たちが戦っただけだ」

語りかけられた少年はそう返し、右腕を動かした。一瞬、その顔に痛みを浮かべる。塞がったとはいえ肩の傷は深く、利き腕は満足に動かせないようだ。

「……ありがとう」

それでももう一度。真奈は微笑むと礼を述べた。

プログラムされた通り、決壊して尚も池の中央付近で射出される噴水。水面を叩くその音が、やたらと派手に辺りに木霊した。

瑞穂が新たな人形ひとかたを取り出して、真奈の穢れを祓うべく本田と対面して座す。後は少女の呪いを消せば、影の魔道との戦いは終わるはずだ。

月影は変わらず、冷たく夜を照らしていた。

不意に父親の前に横たわる少女の影が蠢く。

「あうっ！ あああっ！」

真奈が悶えた。

「何！？」

瑞穂は驚き振り返る。詩緒は駆け出していた。

二人の退魔師が動いたのは、影の魔道の波動が放たれた方向。

真奈はそれに当てられ、その身を侵す呪が強まったのだ。

「……ヤバイわね」

ぼそりと瑞穂は呟いた。真奈は一段と呼吸を荒げている。彼女を襲った邪気。陰陽師が、滝口が感じたそれは、今までで一番強烈な影の魔道の波動だった。

その邪な波動を放つは氷に閉じ込められし隻腕となった魔人に他ならない。

氷の棺に音を立て亀裂が走る。

内部から粉碎される。

そこから禍々しい気配とともに、御影の笑い声が響いた。

「相変わらず詰めが甘い」

陰陽師に愚痴り、滝口は刀を構え、自由を手にしたばかりの魔人に迫る。

「来るか、滝口」

迫る詩緒に御影は、不敵な表情を浮かべた。

「だが、不用意だぞ？」

コートを翻す。その影から幾つもの呻きが漏れる。

そこから溢れ出すのは人の頭部らしきモノ。黒一色の影で形成された痛みを、嘆きを口から漏らす顔が次々と産まれいく。そして、宙を覆う。

怨み、つらみ。生者に対する僻み。口々からもたらされるは暗い負の感情。

そして、それらは自分たちと同じく死の世界に、影の世界に誘うべく生者に襲いかかる。

詩緒は御影との間に存在する影の亡者を快刀乱麻、斬り伏せる。

しかしその足は止まる。数が異常に多いのだ。

「ちよつと！ こつちもフォローしなさい！」

闘う少年の後方で少女の声がする。

瑞穂は式神を使い、親子を守りながら同じく怨霊を相手していた。

「ちい！」

詩緒は舌打ちした。満足に動かない右手を騙し騙し使いもするが、太刀筋は鈍っていく。

「どうした、滝口？」

御影は詩緒に正面から堂々と歩み寄り、嘲笑う。

「本気で私を討てるつもりでも思っていたか？」

飛び交う首だけの怨霊を従え、御影は魔道を発動させる。

それは一撃にして対象に致命傷を与えるべく行使されるものではなかった。

魔人の影が波打つ。影の塊が詩緒に迫る。

「ぐっ！」

鈍い打撃音。滝口の口から漏れる苦痛。

「弄り殺すと宣告したな」

心底、愉快そうに御影は笑う。

衝撃に弾かれ地を転がる詩緒に、首共が飛ぶ。その口で生者を喰らうべく、屍肉を貪る猛禽類かのように詩緒に群がる。

「詩緒！？」

瑞穂が叫んだ。

御影の紅い目がそちらに動く。少年を心配した少女は防戦を繰り広げている。

御影は魔弾を撃つべく残されている左腕を構えた。

「陰陽師。本気を出してやったぞ」

言っや、弾丸を放つ。

「ズルい！」

親子に当たるために回避することは出来ない。瑞穂はとっさに式神を射線上に移動させ、魔弾と相殺させた。

隼の甲高い鳴き声、瞬間、それは呪符に戻り、黒い魔力の塊と霧散する。

「ぐああっ！」

瑞穂の傍で本田の悲鳴が起こる。邪魔する存在が一つ消え、怨念は容易に彼へ接近すると、その体の一部を喰い干切ったのだ。

御影は嘲る。

「どうした？ 瞬殺してみせたまえ」

挑発を受けるも、瑞穂にそれに返すゆとりも余力もなかった。護衛と自らの身を守ることで手一杯であるし、なにより精神の力が限界に近いのだ。魔力を増幅して五行を行使することは精神の力を大きく擦り減らす。加えて得意な儀式でもない撫物も複数回行っている。すでにオーバーワークしているのだ。

「大口を叩いた割には他愛もない」

御影が鼻で笑う。

「……後で殺す！」

残された呪符と五行の小技で、舞う首を効率良く撃破しながら瑞穂は御影を睨み呟いた。

「戯言を」

嗤い、御影は身を反転させる。影の障壁を眼前に展開する。

耳を劈く金属音。

「太刀筋が鈍ったな。三段突きはもう放てぬか」

群がった首を全て始末し、不意打ちをかけた詩緒を、しかし御影は察していた。

「くだらない世話だ」

言い放ち、滝口は後方へ跳んだ。

身体中、ぼろぼろになった黒衣の少年と、隻腕となった黒衣の男が対峙する。疲弊が明らかに見えるのは前者。

「そんな体で私に勝てると思っっているのか？」

「関係ない。俺はお前を消滅させるだけだ」

不利な状態に在りながらも滝口は変わらない。他人を拒絶する道を選んだ少年には、退魔という役目だけが存在意義であり、存在証明なのだ。

「愚かな……独り逃げ出せば死を免れたものを」

言つと、御影は魔弾を速射した。詩緒は何とかそれを回避する。

少年は足をやられていた。肉の一部を噛み取られているのだ。

滝口の背後に回る魔人。詩緒はそれを察知するも、体を反応させられずにいた。

「死ね」

冷酷に一言、少年に言い放つ男。影が揺らめき、何かを具現化させようとする。

「ぐうっ！」

「くっ」

次の瞬間、魔人が後方に、滝口の体は前方に飛んでいた。詩緒と御影の僅かな隙間に小さな爆発が発生したのだ。二人がそれに弾かれる。

その爆撃は火行を行使したことによるもの。瑞穂も首共を片付け終えていた。

「ごめん。微妙なコントロールが出来なかった」

地面に倒れた詩緒に詫びを入れ、横に駆けつける。

「まだやれるわね？」

聞くも返事を待たずに、瑞穂は手を差し伸べた。

「ああ」

その手を取り、詩緒は返す。

「形勢逆転ね」

詩緒を立ち上がらせると瑞穂は御影に言った。

滝口と陰陽師は並び立ち、魔人を睨む。

だが、言葉を受けた魔人は笑う。

「貴様らは、それで優位に立ったたとも思っているのか？」

足元の影から呻きが再び起こる。そして、またも首だけの怨念が大量に産まれていく。

「……冗談でしょ……」

「頑張ったな」

影の魔人は嘲笑した。

第拾伍夜・悪夢は希望を放つ

御影は満足げに、その光景を眺めていた。

人は無様に、影の力にその命を玩ばれてもてあそんでいるのだ。御影の影から産み出された、飛び交う首。個体個体の強さはそう大したものではない。だが、それらは視界一面に広がるほどの数を頼りに生者を喰らおうと群れ襲う。

滝口は、陰陽師は、残された力を振り絞り奮戦するも、後は力尽きるのを待つばかりなのは明らかであった。

真奈をその身で覆い、庇う本田。当然、彼に怨霊を倒す術はない。彼は二人の退魔師を突破して来る首たちの攻撃を受け、ただ、その痛みを耐えていた。

娘を気遣って、苦痛は口にしない。

しかし、真奈に彼の苦痛は伝わっていた。影に流れ込んで来るのだ。彼らの流す血が、そこにある感情が、闇の力を活性化させる。彼女を蝕む呪いは徐々に強くなっていった。

楽になりたいでしょ？

真奈の頭に直接、声が聞えた。闇の底、絶望の淵から届く声。もう一人の真奈であった存在の声。

私に身を委ねなさい。それだけでいいのよ。

その存在が真奈に囁く。その声が再び聞こえるまでに、影の支配力は真奈の中で肥大していた。

悪夢を終わらせたいたいでしょ？

貴方の声は、もう聞かないわ……私は生きるの……。

抵抗。真奈はもう死を求める少女ではない。

馬鹿な娘。この悪夢はもう終わらないのよ。決められた終焉を迎えるだけ。貴方にはそれを変える力はないもの。

マナが嘲笑う。

！　いいえ……在るわ……！

彼女の言葉に真奈が見つけた光明。

貴方は私だもの！

少女が一際、意識を強く持つ。

何を！？

貴方を従えさせる……今度は私が！

馬鹿ね。貴方が消えるだけよ。

嗤う影の意思。

私は消えない！

「私が守るもの！ 私は生きるもの！」

望みを叫ぶ真奈。その影から刃が伸びる。父親を襲う「魔」を貫く。

「真奈！？」

本田が驚きの声を出した。

果たして、彼に庇われている者は。

「……お父さん、大丈夫？……」

その娘は紅い瞳でも、銀髪でもなかった。彼女は藤川真奈に他ならない。

「私はなんともない……」

虚偽だ。背中から流れる血が地面に広がっている。

「それよりも真奈、君は大丈夫なのか？ 今の力は……」

本田にとって、自分よりも彼女が大切なだけだ。

「……大丈夫だよ」

それが解つて、真奈は嬉しかった。苦しいのに、顔は綻ぶ。

「……私、がんばるよ……」。今度は私が、みんなを助けるの……」

そして、そう告げると、少女は父親の体にしがみ付きながら起き上がった。

ふらつきながらも、立ち上がった真奈はゆっくりと瞼を閉じてイメージする。

イメージは現実化する。空間に次々と影のナイフが具現化されていく。ナイフが創造される度に、彼女を闇は蝕む。真奈の心を黒

い意志が包み込み、消滅させようとする。

だが、少女は負けない。

「真奈さん!？」

「何だと!？」

陰陽師と魔人が驚愕する。

「……飛べ」

ぼつりと呟かれた言葉。だが、その命令に従い、一斉に射出される影の刃。陰陽道でいうのならば、それは死の上に成り立った陰の力。しかし、そこに込められたのは陽の意思。少女の希望、願い。怨霊を刃の雨は殲滅していく。

「小娘が!」

怒りの形相を浮かべ、御影が動く。

「お前の負けだ」

魔人を止めるべく、仕留めるべく、滝口は斬りかかった。

「なめるな! 雑魚ども!」

御影が障壁を造り、滝口からの斬撃を遮ると同時に魔弾を乱射する。

「ダメ!」

真奈は跳躍し、詩緒と御影の間に現れると、影から障壁を産んだ。魔弾を防ぐ。

「あつっ!」

少女の心が折れそうになる。真奈の自我を締め付ける呪いは、身体的な痛みを彼女に課し始めていた。

「詩緒! 真奈さんが!」

「解っている!」

真奈の限界は近い。彼女から発せられる影の波動が、禍々しい波長に変じていくのが二人には解る。

「だったら、時間を稼いで!」

瑞穂は詩緒にそう告げて、詠唱に入った。

「太陰水気、省みる事無く我が命に服せ。小陽金気、疑う事無く我

が命を行使せよ」

増幅。^{ブースト} 清明桔梗を描きながら、水気、金気への支配力を高める。

「……まだ！」

力を振り絞り、真奈が形成させた大鎌を御影に振るう。御影はそれを難なく捌き、真奈を襲う。詩緒がフォローに入る。魔人は滝口の攻撃を受け流す。流された刃を詩緒は返刀、薙ぐ。御影は避けるべく、その身を後方に滑らせる。

「退け！」

詩緒は御影に隙を生じさせると、真奈を後ろへと逃がした。

「虫けらめ！」

御影が吼えつつ構え、魔弾を撃つ。詩緒は怯まず魔人へと立ち向った。痛んだ足を無理に使い、舞う。避けきれず右肩を擦れる影の凶弾。そこから散る鮮血。

「水気、金気を生じ、金気、水気を剋す」

描いていた清明桔梗を瑞穂は突如、反転させ描き始める。支配力を高めた五行に、理に反する事象を強制的に命じたのだ。気の流れも反転する。故に逆五芒星。

それは原子レベルでの五行行使であった。

水生金、水素を重水素に変える。金剋水、大気中の水素をプラスマ化させるべく、電子を奪いイオン化させる。

詩緒と御影を中心とした空間に音を立て、幾つか放電された光が走る。

「真奈！」

後方に逃れた真奈の体が揺らぐ。駆けつけた本田は少女を抱き止めた。

「……お父さん、私、がんばれたかな？」

苦しそくに呼吸する娘を、父親は強く抱きしめる。

「ああ！」

そして、強く頷いた。

「太陰転じて太陽と成し、大極へ至れ」

瑞穂はただ集中し、詠唱を続ける。

「賢^{さか}しい！」

「お前がな！」

閃く滝口の刃。その右腕は最早、動いてはいない。詩緒は左腕のみで刀を操っていた。力の乗らないその攻撃を、御影は影の刃で易々と受け止める。

至近距離で睨み合う黒衣の滝口、魔人。

「相生、相剋の理を破棄し始原の陽を生み出さん」

大極、即ち始原の陽。それは太陽。

「終わりだ」

二人の黒衣の男は同時に、同じ言葉を口にした。

直後、御影の影から、滝口を貫くべく刃が伸びる。

詩緒は魔人を前に、跳んでいた。大きく跳躍し、後方にその身を逃がす。

「我は命ず。その力を以つて全てを灰燼と帰せ！」

その瞬間、陰陽師は詠唱を完成させた。口にされた発生させる事象の宣言、命令。

詩緒の目の前に、御影を中心とした大きな光の球体が現れる。激しく音を立て、様々な色を放つ球体。その光は辺りを朝へと変える。それは今、内部で起こっている事象を外界に逃さないための檻である。プラズマで構成された光の結界だった。

その球体の内部は光に支配された世界と化していた。

瑞穂によつて産み出された重水素と水素イオンは、詠唱の完成と共に、融合させられたのだ。

その融合により、生成されたのはヘリウム3とガンマ線。

それは核融合に他ならない。恒星で絶えず行われている化学反応である。

辺りに朝が訪れたのは、僅かな時間だった。

大きな光の球体は消え、付近に夜の帳とばしが降りる。

瑞穂が行ったのは正統な五行の秘術ではなかった。外法だ。言わば、五行のロジックで行使された魔術である。

陰陽道は陰陽と五行により総ての事象を解析する学問。彼女はその理を破り、その論理だけを用いて、超極小の太陽を創り出したのだ。

球体の存在した地表には、クレーターが作られていた。魔術により創り出された太陽は、しかし、地表さえも融解させ、その表面をガラス化させている。

魔術行使した少女はへたり込んだ。そして、吐血する。

それは魔術行使の代償によるものだった。陰陽師は自らの命の一部を引き換えに、力行使したのだ。

瑞穂は飛びそうになる意識をなんとか取り留めていた。彼女には、まだ仕事が残されている。真奈の呪を早急に祓わなければならぬのだ。

その少女は、父親に抱きかかえられていた。

「……大丈夫か？ 真奈」

本田は心配そうに尋ねた。

「……うん」

苦しそうに息をしながらも、真奈は微笑み、返事をした。

魔人のすぐ近くにいた少年の姿は、クレーターの淵に在った。

「魔」の気配はない。

「終わった、か」

ぼつりと呟くと、その場に背を向け、詩緒は瑞穂の方へと歩き出す。

風が吹いた。

木々がざわめく音がする。

少年の左手首の鈴を、微かに鳴らす。

影が揺らめいた。

「え？」

生気なく、瑞穂は声を漏らした。

球体の在った場所に、影の塊が突如、現れたのだ。
「嫌あああああつ！！」

本田に抱かれる真奈が絶叫する。

大きく歪いびつな黒い塊。中心にあるのは御影司郎の顔。

詩緒は振り返った。

影の塊から真っ直ぐと少年に向かい、高速で何かが幾筋か伸びる。

それは影で形成された槍。

足を、腕を、腹部を、胸部を。槍は少年の体を次々と貫いた。

最終夜・鈴の剣士

流れる厚い雲が月を隠した。

夜の闇に狂ったように、御影の高笑いは響く。

「……………どうして？」

影の魔道の化身、巨大な影の塊と変じた御影に、瑞穂は立ち向かう気力なく、呟いた。

瑞穂が行使した魔術は、対象を確実に仕留めるだけの威力を持っていたはずである。

あれが効かないとすれば、最早、人の力でどうにかなるレベルの相手ではない。

御影は直撃を受けた訳ではなかったのだ。

影の世界へと逃避したのである。

御影は外界と隔離された、その空間にその身を移したのだ。

否、正確には、意思を有する影の魔道が、術者を失わないように強制的に彼を引き釣り込んだに過ぎない。

そう。御影は影に取り込まれたのだ。瑞穂の前に存在するそれは、暴走した影の魔道に侵された人の慣れ果てであった。

邪悪な気配を辺りに撒き散らし、それは嗤っている。その影の塊からは次々と影の怨霊たる首共が放たれていた。

瑞穂は寒気を覚えた。邪気に当てられ身震いを起こすなど、陰陽師として生まれ、数えるほどしかない。

疲弊している事実。確かにそれもあるのかも知れない。しかし、恐らくはそれに因る要因など些細なものだろう。

陰陽師の少女の上空を塞ぐのは厚い雲から、暗い感情の亡者たちへと変わっていた。先程の攻防戦とは比べ物にならないほどの、圧倒的な数のそれらは一つの生物のように彼女たちの上空で蠢く。

一部の首共は、致命傷を受け、倒れる滝口の少年に群がっていた。我先にと、その肉を喰らう為に。

「……ごめん、詩緒。お手上げだわ……」

瑞穂は溢し、うな垂れた。

「……私も終わりっばいわね……」

獲物にありつけなかったその他の怨霊たちは、残る生者に襲いかかる隙を窺っていた。

鈴は戒め。他人を拒絶する決意の凝り固まったもの。

「僕は大切な人を、誰も守ることが出来なかったんだ……」

最後に一言、人としての言葉を残し、友を止められず、友を救えなかった稀代の滝口は、その悲しみに、無念さに支配された。

渡辺柁希という少年の最後は病に因るものでなく、鬼に墮ちたことで訪れたのだ。

だから、少年は他人を遠くに置く。例えどれほど優れた人間でも、どれほど強い人間でも、鬼という暗い感情の果てを知る者は、それに陥り易いのだ。感情というものからは、滝口とて護ることができないのだから。

渡辺柁希の最後は、その一例に過ぎない。

一例。

そう。その出来事は、彼にだけ心を開いていた少年にも耐え切れないほど悲しみを与えたのだ。少年の心に影を落とし、そして、その心にも闇を作る。彼を葬った滝口の少年もその時、悲しみに囚われて。

突如として「魔」の気配がもう一つ、産まれた。

それは、真奈から発せられた影の波動ではない。

それを放つのは、怨霊の群がる、致命傷を受けた少年の体。

ゆらり、少年は立ち上がる。

美しい顔の面影はなく、内臓が垂れ、喰い千切られた肉からは骨が覗く。

少年が放つ邪気は、影の怨霊を霧散させ始めた。群がり来る怨霊を、断末魔と共に、次々と霧に変える。

その存在は、さらに、その負の力の霧を取り込むと自らの力に変換していた。異常な速度で肉体を復元、再生していく。

再生が完了したその存在の姿は、渡辺詩緒と酷似していた。

瞳孔の開いた、虚ろな目。

その身から絶えず放たれる凶悪な邪気。

それが渡辺詩緒との相違。

彼から発せられる邪気は、影の塊となった御影を畏縮させるほどに強烈であった。

「馬鹿な！？ 滝口、貴様……」

焦りが表情に表れる。

「み、認めんぞ！」

それは御影が魔人となった時に、失くした感情を湧き起こす。

影から次々と産み出される怨念たち。その怨念たちが作る死角から、槍を放つ。

詩緒は高速で迫るそれを見切り、易々と片手で搦んで止めた。

「敵か……」

口を開く。虚ろなままの瞳を、しかし、影の塊へと向ける。

「うおおおオツ！」

御影は空間に作れるだけの魔弾を発生させると、怨霊共と一斉に少年へと仕掛けた。

だが、それに動じず、少年は手に在る刀を真一文字に薙ぐ。

魔弾が、怨霊が、剣閃で生じた斬撃の波に裂ける。空間自体を切

り裂いたかのように、一太刀で前方の障害を断つ。

その斬波は御影にも及んでいた。

巨大な影の塊が二つに分断される。

「……鬼?!」

御影が呟く。詩緒が放つ気配は確かに鬼の気配であった。藤川郁子が堕ち変じた、その化け物が撒き散らした邪気と同種のものだった。

しかし、質は違う。この少年の放つそれは、絶対的な力の差を感じさせるのだ。恐怖、という感情と共に。

それこそが、御影が失くしていた感情。

その眼前に、恐怖の権化が舞う。

「ひいひいひいひいっ!」

御影は足掻いた。影からあらゆる武器を具現化し、幾種もの殺戮の力を解放した。

その総てを。

少年の姿をした破壊者は、手にした一本の刀で紙屑のように斬り裂き、己の瘴気で無力化する。

そして、影を斬り刻む。寸断していく。

ほんの僅かな時間に。魔人は、影の魔道はこの世から消滅した。

鬼の気配を持つ少年は、己の敵と見なした存在を滅殺すると、静かに立ち尽くす。

滝口の少年は、完全に鬼に堕ちたのだろうか。

「……詩緒?」

瑞穂は立ち上がると、少年にゆっくりと近づいた。

そう。それはまだ、鬼ではない。少女の呼ぶ、渡辺詩緒という存在。

身に付ける少年は枷としている物が、しかし、彼をまだ、人として繋ぐ絆となっていた。それは人の心の結晶。渡辺柁希という滝口が守り、渡辺詩緒という少年がもたらした「笑顔のカタチ」。

小さな鈴は微かに奏でる。しかし、その存在の心にやさしく、大

きく響く。

渡辺詩緒は鬼ではないのだ。ただ人を「魔」から守り、「魔」を討つ武士、もののふ滝口。

鈴の剣士。

鈴は鳴る。

少年から生じる障気の波に揺られ、鳴る。

少年の秘められた暖かい心に震え、鳴る。

その鈴の音が浄化していくように。鬼に極めて近い存在の放つ邪気は薄れていく。

「……言っただはずだ……渡辺詩緒。お前を殺す人間だ、と」

呟いた詩緒の瞳に、正気が戻っていた。

雲間から月が覗く。

その光は、辺りを静かに照らしていた。

影の暗躍した街から、遠く離れた空の下。

住宅街の一角、一人の女学生が玄関横のチャイムを鳴らした。

チャイムの上の表札には「本田」と標されている。

暫くの間があつて、扉は開かれた。

「ごめん！ 沙織、待たせたわね」

そこに現れたのは、かつて「藤川」と姓を名乗っていた少女。

「うっん、全然待つてないから」

沙織は微笑む。

「行ってきます」

少女は振り向き、中にいる父親に声をかけた。

「気を付けて行っておいで」

返ってくる声。

「は〜い！」

返事をする、少女は沙織を促し歩道へと出る。

そして、二人の少女は並んで歩き出した。朝のやわらかい日差しを受け、いつもの通学路に行く。

「そう言えば、昨日ね」

他愛もない話が続く中、沙織は唐突に話題を変えた。

「何？」

「真奈はどうだ？　って、いきなり聞いてきた男の子がいたのよ」「え？」

少女は驚いた。引越してきて、まだ数ヶ月と経っていない彼女に、思い当たる節はなかった。

「かつこいいんだけど、無愛想なヤツだったよ。態度でかくて。全身黒づくめの格好してた」

「え？」

「あ！　そうそう！　左手にね　」

「小さい銀色の鈴？」

沙織の言葉をそう引き継いで話すと、少女は笑った。

「なんで解ったの？　誰？　やっぱり、知り合い？」

「他人よ」

少女は返答して、再び笑う。

少女の背負う罪。影に操られたとは言え、人の命を奪ってしまった事実は消えない。しかし、だからこそ、彼女は懸命に生きる義務があるのだと思っている。

必要とされるから、人と接するのではなく。必要とされなくても、人に尽したいと思う。

あの少年のように。

「今日もいい天気ね」

沙織は空を見上げた。

追って少女は、本田真奈は空を仰いだ。

「そうね」

明るく晴れやかな声。

月の残った朝の空。

それは高く高く澄み、青く青くどこまでも広がっていた。

戯言・挨拶（前書き）

本編ではありません。よろしければ、お付き合い下さい。

戯言・挨拶

この物語はフィクションです。作品に登場する人物・団体等は実在するものとは一切関係ありません。

……と、一応お断りを。というのも、陰陽師、陰陽寮、滝口という作中の名称は実在したものです。

「陰陽師なんて、平安時代の事でしょう」と思われる方も多いでしょうが、陰陽寮は近世、1870年（明治時代・初期）まで実在に政府機関として存在してたんですよ！ファンタジー色の強い国ですね。日本はw

さらに、主人公コンビの名字…ええ。ご存じの方もいらっしやるかも知れませんが、賀茂家（もしくは勘解由小路家^{かんのうじ}）は晴明で有名な安倍家（もしくは土御門家^{つちみかど}）と双壁を成す名門陰陽師の家系ですね。瑞穂はそこから名字を頂いています。そして、詩緒の渡辺ですが…何名かの方が興味を持って頂き、この作品が他の現代退魔物語に比べ、稀な設定となっている役職、滝口に由来するものです。

ファンタジーもの、もしくは日本の古典ものを好きな方は知っている方も多いと思われる伝説、大江山の酒吞童子退治。はい。その源頼光の四天王、渡辺綱から頂いています。（綱は茨城童子の話でも有名ですね）

滝口という退魔武士団は実在しました。彼らは宮内の警護を始め、武力で退魔を行ったそうです。（残念ながら、滝口の活躍する話はないようですが…知っている方、教えてくださいw）特別な役目に着いていないときは、都の外れの滝で鳴弦^{めいげん}を行い、都から魔を祓ったとか…それで滝口と呼ばれるようになったそうです。その滝口の多くは渡辺綱の血族で在ったというところから、詩緒の名字に持って来ています。

しかし、滝口はあくまで役職、仕事であり作品中のようにボラン

ティアで行われてきた訳ではありません。しかも、歴史の主人公が貴族から武士に移ると、その存在自体、消えています。ですから、この作品は史実の上にKによって創られたフィクション、ということとです。

本物の陰陽師の読者の方がいらしたとしても、そういうことですので、「本物と違う！」等の理由で僕に呪をかけないでください。お願いします（涙）

さて、タイトル通り、くだらない話をして来てしまい、申し訳ありません。本題に入らせていただきます。

4 & 4 K氏、毎回のコメント本当にありがとうございます。指摘の書き直しポイント：まだ手付かずです（涙）この作品を完全版に直していく際に、きっちり修正させてください。

沙堂留々亞さん、貴方のコメントに支えられました。本当にありがとうございます。貴方の言葉がなければ、どうなってたことか…。糧になりました：本当に。

月城柚氏、貴方の存在が非常に良い刺激となりました。さらには氏にお褒め頂けるとは、顔が綻んで大変でした。仕事だったのにW本当にありがとうございます。

友人TK、君の頭脳・知識なしに、この作品の設定は産まれなかったよ。たぶんこれを読んでないだろうけど、ありがとう。君が親友で良かった。

そして、僕の稚拙な物語を最後まで読んで頂いた読者の方々、本当にありがとうございます。

皆様がいたからこそ、僕は初めて文章化された連続の物語を、完結させることが出来たと思います。心から感謝です。

また、よろしければ、感想等寄せて下さい。次回に活かして行きたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

最後にこの様な素敵な場所と機会を提供して頂いた「小説家にな

ろう」の関係者各位に感謝しつつ、では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5408a/>

悪夢は影と蠢く ~現代滝口譚~

2010年10月8日13時37分発行